12
881
50

椎本　宇治十帖第二

巻の名は歌によりて名とせるなり　立よらん影たのみし
椎かもとむなしき床となりにけるかな　此巻も薫の年
廿二の年より混乱によりてまちがへたる也　飽紀廿二
巻は竹河巻の此ふるひ如くし中納言たる廿一巻より
し年を経し語と見えたり　花　の詞を見て其の名
也せり薫十九巻の末より廿巻は其事どものみへたり
十九の秋中納言と成たる也竹河末に同時也とぞ
其の名あるり椎は薫廿二の末より次の年廿三の末まで
のる也とぞ

二月の廿日比に兵部卿宮はつせにまうでて給ふふるき御願
なりけれどおぼしもたゝで年ごろになりにけるを
白氏物語人参給とぞ長谷寺は大和の国初瀬の郡に在

宇治乃わたりハ中やとりのゆかしきにおもひなよせられ給へるな
るへし　　あま薫乃八宮ハ姫君のうへ御白露なりたる
給へとも身ハ一ところにはんのかよはせまてく物数人をまねき
給ひとの有や南都下向乃人もや宇治をハ中宿まてを惜く
の河(カワ)舟(フネ)ありともを平等院にてくは徹(テツ)の有也とく　　宇治をとうへとい
うしめしやといふ人も有ける里の名ハ
姥守りかなりして心ある事也
古哥　我庵ハ都のたつミしかそすむ世をうち山と人ハいふ也
同　忘らるゝ身をうち橋の中絶て人もかよハぬ年そ経にける
本哥未勘ニ　世をうち山との哥ハたゞしき
むかしめしといふ里の名を古今ハ哥に世をうち山をそう
ち橋など読みし名をとりてかるゝ也　此源氏乃物をとも
てよめる哥也　承久元年七月宇治ハ平等院の時秋(アキノ)字(ジ)迦也

定家　待人乃山路ハ月もさえぬらん里の名ハはしなかりしきぬを
家隆名所　宇治川霧のなまうちわたりてさゆる松の里ハ桜とうけ衣かれ
ちつくむつましう物語さるてゆんも大にかれしや上達部とお
まさはかりまつり給ふ度上人あるとはゆしもとも心は世なり
おかしく人もくなくはかりきつまつり　　人をうらぬといふある
里乃名も白妙の心をは姫君たちにとみそ給ふてより
八幡宮むつましう名の里乃名推と也
六条院まち律くありて大臣家より給ふをとろ六川より
とらたいつとひろく抽きろく宮わたりに此まつりをせさせ
給へり　　源氏より侍らりとハ夕霧ハ知り給し給ふ遊び(リシ)
のうちめく白妙のはまのつもさせる為くなりたりへし遊
よりやうちやハち(シ)んある(ヨ)まなんやたく河乃あるをさかとふ心
おゝへし　貫之哥　拾遺　朝日よりもやうち能人たつらと百

年ふる宇治のさとをたづねてその跡をしる　これをもおもふべし
乃心にや　此説同じく非なるべし
（花）河原左大臣融公の別業宇治ノ郷に有陽成天皇このんで
らくはこれにおはしましけり宇治といふは此也宇多天
皇朱雀院なども行幸ありし所也其後九条殿の
御遊猟ありし事李部王紀に見えたりそのゝち
六条左大臣雅信公の所領なりしを長徳四年十月の
比御堂関白此院を買得て同五年に宇治の家
まひ遊ぶとありさて宇治関白の代に至りて永承
七年に寺になさる法華三昧を修せられ平等院と
なづけ給へり治暦三年に行幸ありき今は藤氏の長者
是の左大臣や六条左大臣ともに法成寺関白に伝へたまひしを
六条院より伝へて此は宇治によれり（?）とぞ

八雲一鈔などに夕霧より給はる事也
おとゞもさうのむらさきの紙にかへしおほしたる紙また
くれなゐのうすやうにてつゝみ給へく
　夕霧はみなみ也
中宮もこれに　紫清くしる紙へまいらせ情土左とも也
えんじのうすかみにまゐらせ給へり　相つゝにくれなゐ紙は
　ぬのも夕霧よりいれさせ給ふ也
宮もさきまゐらせ給ひし也御ゆしかけるに　夕霧の紙の紙
ことに紙白きを三曲と云也あかくさふらふる也
宰相中将などのむらさきにまゐりあひの紙へけるにたいらか心やすき
もて　薄むらさきの紙にて夕霧よりさらしや
　もとは白きなるへし
あのかたの此事しらぬはさくらんとかへんゆきぬおもふとせハ

うちとけて見にくゝこそしき物よりほかの給へり
八才の姫君のあそびされにくき白氏文集をさらへ給ふの
はなやかに夕霧は文集習ひ侍し給へる源氏薫の文集よみ給ふ
ゆゝしく可観との仰也
源氏の九歳より大弁侍の宰相中将より大将になりたまひ　夕霧は十二にて
の元服もせられしより十二にて元服し給
みゆるふみなんや
此后も四十八歳にてひきく給への文なれと大かたされにおほせ
をいとゝうきことなく　南今公今上后の御中宮也
まいて六条院の御かたはさくれくもみなかくし
の天子心に給つゝまつり給　白宮の御はうえれは春子
なまじゐにはうかされくやまとしうゐるとくまでゝ
つれなきまうしも

あるはまさてはちつひあとわかくらうしあや　宇治の
中やさうれはうとあり
碁もろくくをのもんとなるとさうせ出さく心くなしさ
ひろくし給ける家いはあちひ給ひねはありさにあるやまうしをねは
さまして　碁　双六　たきぎはたやうざれたるのやうそり
しても盤の上にふくさんとかのとありとたみにえてつかき
そいつる手ぐひまや

河
囲碁　尭始作之　双六自天竺起又孟嘗君斗持統
弾碁　後漢書云梁冀云弾碁藝経弾碁両人対局白黒十八枚先列碁相当更先弾也其局以石為之先勘之

こにやさしくはんの心あかまれたうちやもとゝ給はく夕はさ
そはくとあとめしてあそひ給　白氏の山ゐはくらのき
給りまゝ給てこの姫君を常さかせんの心也
せのうまゝれきあるかなれのそとをもてまやしても

のねもこまかなる心ちし侍　宇治のまもりなとはかりける
宮はおほかりけるとそいへり
かのひし宮は冷泉院の東宮にたゝせ給へきはかりことをせし
あさましき事をきこえしはかりなり　優婆塞の宮のかき
より宇治院八年と云へし何もひとへにしのふ
八川すさこなかれ舟よせたる所なと思ひとち
うちもとの橋守のやうなるをいふなり
ひとりのこと思ひけるにかくらうて　八宮の御事也
弟をいとほしうと思ひよそへてたなるに
うは六条院の御弟にて侍りしかは
文の様にそ明経のことはりを
そひたるは　第八宮の明経也
ち此世をもそれ第の様にしてあさましき事

御ゴ縁シ也　薫の事の意八波は何とかれたる奴
七福本り色をかれたる人し
ひとりさとゆるは　八宮の御事也
あるれは思ひしゆかしくやうやうれあるひかるとせて
何のはとあらてもしくさにけ春年月のさは子をほく
かねへてうかうのひ女けるとの様はて姫もひめ君たち
の御有様あるしもうの山あとうとよ思ひなりて八やまと
もとのれとお思し給へまうれ　八宮の薫部すてたるを
とおもうのやうは管絃あるを久しくなし給ふとの也
宰相の君ありしうはちのゆかさゆくたのすましきものつね
はしもお申しひよ御事しゆて　薫を宰相とおほせと
為心あるへたまはさとおもしとお御宮のやう也
まゐりてしもやうれひあるさうゆんとはふそうかるをお思ひしみ

まはれくやとなかめ給ふ　薫とおもしくおほしめしこそ
客人ハつくしきれるしさをもみむとねむこ給ふ給ふかなしく
やまとしき世の中をのかれ人なとハ箏にともいふなりひよ
うき給へとの八宮のんなり
雨る雲の夜もいたくおしかはるをとなりふ給ふを
ひきんハひのまそれいとあるかめる心ちしてあはれなる
こともおほし給ふもおもしろく霞のたまる事に
総角の時ふなれとも八宮ハあはしく給はぬ白宮ちとのり
たま給はあるゝ心をやらせてなくさき給ふへきいとしを
まこの夜乃月やくるしき給ふとや白宮のんなるへし
ちるさくらあまはいさをそむるちとくみ給ひけり
なれ
打ち
桜さく桜乃山桜ちる桜あまはさくちくあり

川そひ柳のおきふしなひくふかけるをとおかしうほれ
くしき給ふみくしき給ひ給ふへくのとかしくみるとそさる
しやう給はさる
河六柏男之
つれもしろ川そひ柳のもとに給ふてこれとそのねたえけれ
宰相ハうち給ふをもらしきの宮ありまことにやとおほしを
とおまさるへきをまきなくひとつことふかそ給ふんるあかるを
つれはともかくにやと思ひもとひ給ふとに
薫乃そとしくへ兵部卿宮へときこえ給ふをや
これよりもかたみあり　八宮より薫へかたみあるも
山風より霞を吹とく色ハあまとを立てゝみゆるとの見ゆ
八宮　薫と薫乃吹給ふと八宮給ふのこえもかくるゝ行く
上の句をいへり薫よれ声ともいふ霞吹とくるとよみて給ふ
もとなる枝やらそしてけんかなるやと八薫のゝへ給ふ給ふ

一　きぬすげを流りよ揚へてくむるなるや
あるにつとおかしうくち詠つりをあつかりやきしへ
つくおかしうお用に高こうあくつとハうを逢せんとて
白河のんや薫の代りをすし給や
たとえの汀よ流ハ色くりともたな代古紀くよへ宇治乃川くせ
白河也　　そとひ流ハ色くりるとも風の吹くよふやうに
の給ひをきの氣や落る名ハ八家ありまてしられとかま
しや
中将ハまうて給あそひよんつまたる名くちさ揚ひく
薫をハ家へ来給ひて名遊あとききりく同さし給
とみへたり
さしやり給ひと　　八家へ舟よくさしやるや
くんなうくををあそひく　　船中也るや

河水
醍醐楽　古云　くさもゆかりもきそこ絶あをあり
河水楽一説云葉新楽　河鳴乃逍遥なれたまつとにその名あり
あつきも猶る古事にお用くんもあるらくやあるまし云
写せ謡も又勧盃の辞なれハ醍醐楽をを奏しけりわる
さうも従酒宴ハ管絃以後と見へたり為くハ又比曲を
覚悟せんもお後もるにや或説の代宇県初之の逍遥
やそて大の楽をとひきんも知る人ゝる名とやう詞
よもくの代のこふそたる腐あるとあま代役河水の名ある
宥つきうと見え侍りき
村上御記康和元年閏三月十一日宴
楽人四人ハ今案醍醐楽ハ古楽也　舟楽奏醍醐　舟楽りし例
よ給あるにや
名よの揚そたる節にはくらをおろしたるそし此色そへあると

されはこそ八つとはしらる　宇治乃河さへとあり
ゆへある宮たちなれはこそ心ある舟もおりかけ給ふ
　是も宇治院のことなり
こゝ又さ海とは山里ひなか　白氏乃中書地より
ちりひく八宗乃おりしきは　を山里のやうに志川の城
御ちるへし
あしろの屏風なとれいと清らかにおとなしく見ゆる所にも志可
らひを　あしろめくらしたる紙紙なとをいふ
又さしあしろにまさるなともいふなり　河骨(フツ)一所の
て張(ハリ)たる屏風也　昔八山居(世事)なとのたるめしさ網代(テンテト)に
八さるも也漆骨(ニツコツ)にかける筆を張(ハリ)細組(ホソクミ)にて閉合(トヂアハセ)たる物也
あしろ屏風と云又ひあしろの屏風と云物あり乞卓
のひあしろは八竹を日にさらしてまたる物也

その折の調子
物の心しらぬ人々さへいとおもしろくきこえけり
笙のわさならぬ人と掃地(サウチ)なとまてかき
いかゝへ人の様なるをいふとは　なれひとさまのとを　若さう
何と給ふ秘術(ネイフツ)の楽器(カクキ)とも也
わさとゆつりきたる物やはあらて清らかにひきならして給ふて
持まうけたる物やうなりあしきそ也
いちこつてうの心にさくら人あそひ給ふ　花　桜人は呂の哥(リヨウタ)也
呂は双調(サウテウ)律(リツ)は平調也双調の楽なれは多くも一越調(イチコツ)とかやうして
此の人也一越調もまた呂也　萬呂のなと桜人はそれ
とあるやうに　私云催馬楽(サイバラ)也
あるしの宮は御きんなとの所はつかなくてひくし給ふ手あり
八宮ある也

なに此うたを紙にて四方もつまらぬほどかくうきあはせ給
ふるんとうたさしまめくなに此松をかきなくうたちり不
ものこ[illegible]八ありやすくにやうかる有物也不見此心をと
うちとくるの歯固（タウジ）もあるまするべし
見るなる遊女あまやむりんてと物なくおほしつらさ
人くに云ひしこたゑて　八文の浮雅えしうくさくは
さんのくや
不り浮をさるあるしいとわりしう古路ひくく我に云ひや
うらしゆとふるとハ　浮もそありのるや
あさえんうとめくつやくろぬ人あまくて如川きこ四佐乃
めなるたるあと　あさと云ふはうあらもを王孫と云ふ狩うハ
なれといつあや大きさ四佐王孫乃人の四佐とある紙云也
河土ニ（ソンワウ）式物語まもととも生王家
生孫王云等論とあり　大さこ四佐古人（コ）云四佐と只やり

古今序には人丸を三位とおほせなされしにたるるを
手よみ元抜おほんこさいのとわきぬ正（ニヤウ）三位（井）云子細なし
是をおほさすを王（ワウ）氏字也王氏乃四位といつや生孫王同格也
かく人あまんつはありとなるいとれしうのすくなきにやさ
名人とさうるを為りあひく　八文ハ客人乃わたり路と守文
て各（カク）称（チウ）乎ふ系路法さも八宮れ浮（ゴ）不（フ）年ふふんとうろそ
するといつとれしうちて系つるをや
色いしら称人もさしるまをなさし法　是そ法酌（シヤク）とる人也
親子（ヘイシ）取人（ヒト）さと
なるなるんにかるめあまくうくしうまでおもし給ウ
付こしふ雨も王孫とみゆるやのそや
あらく字君ちハ法むとあまきさら此かきるろ紙ちん浮存ろさ
こなりて　蕉をとをしめ同居の系をさら此ゐ也

心はへもあるへし　なをひとはへるうたそ哉なとにはん
とはへるをもあり
かの宮ハまつそのやまとの花のたよりにあなかちにおもふさ
まかとうの物わりにそふとよみ給ひて給へくおもしろき花の
ええる御おもしろ給へく　白文云こそもろくし々八宮ハえ
見るもを給ひそくへてとうしもまうしくさひとく姫君へ云む
気しやしまくや
河とも此たまのもとへまうさんはれおりしきしも思なる語
河 殿(テン)上(シヤウ)愛(アイ)楽(ラク)也
山桜匂ふあたりに尋きて　おなしかさしを折ける哉
白文云　細云姫君の方をも同しかさしと匂(ニホフ)花と文云ようをも
色折て気色せさせ給ふおもしろくさ也ハ心なる也文説
すよ白八宇治の山桜を見来るも折ましかさしと

八宮の宮も是也姫君たちも宮なれハ折なしかさし
也ハゆへる也　弄 姫君の方をも思ふとをゆうしうるひとくは
かさしを折とよみ給ひて　河 鏡(ケガ)扇とそのむかしの
見しりゆへハ折なりうさしをもたせてそハせめ
野を御なつかしみとや宿らんはくるをいふそうへたちを山の
み侍く　草子の批判也是ハ白文の文言也かやうの所
あつらしきに有心を御折しゆへ也
古赤人
春の野に菫(スミレ)つみにとこし我そ野をなつかしみ一夜ねにける
河
紫の一もとゆへにむさしのゝ草はみなからあはれとそ見る
普通ハみなつむ也　若(モシ)異(イ)説(セツ)本(ホン)花　白文宇治上
夜となるを語へるゆへに野を御なつかしみとも語へる也
弄
春の野の菫(スミレ)花云ゆへるをさしたる事とと
故宮しまて御傍らの花をかさしと語らひし々まて

あとのうちもなうくうつくしきことにほひまさりしるとあるへし
ともしきにはわれは中君のそうり給ふ　姫君の旨
宮人の兵部卿宮也　此家也
うきしめ花のたよりに宮のつきしもとをさかぬも君の振人
兵部卿也　花といふものによそへて此梅のととひ給ふへし
春宮の心をしらぬなれはよしにつひならぬ給也
我思ひよそへてしらせけむとおほしめしけるにや給へり
とれ奈しも何かわからん林の野にてましてあらん苑
此門の桐葉也とも奥に有之怪のありと八音より
不動之　白宮の死の文のありと何かにけんの
声に残して出給へりと
常に河風も心よりぬにしたかつて地の声ともおもしろくあ
そひ給　春の鳥追風にはやくひとるると宮給ひしと

あるしはこの君かはらやをいとめてあらかして
の梅の香のととくるや知らぬとは何事ともなされ
とれ給也
はむくへり前大納言なおはせしを以て宮給人の方まさ宮給つ
とひ　白氏文集の詩の心のうちよりのれ給ふやうに紅梅大納言そ
の至給也　弁　紅梅大納言也　大納言紅梅と前大納言と
太夫の君と太政大臣といふも紅梅をうしなひしもの也
見えしありとて
梅さきかうしまゐてきかひしるを給はられへしのにも
見のこゝろんせんまし常に　各これさえおもしろくひかるも
文集文の人にはいそしてやおいて　白氏給ふ人と
はつくとをとめて今一度姫君北のかたへ給ふあり
むとれは也

花はうつくしきもの乃ほとこそなけれやまと歌とのゝ人にかよはぬ

宇治の宝蔵におさめられたるへし

かゝるものやさしきにもうつくしきことも知られぬと

菅丞相も道真とも菅と云人ハさやうに先生(サヰ)是ハ絵乃とし　唐(タウ)乃詩(シ)文和の

ともあるへし

うれしくて帰るもこゝろなしけり　例乃式部乃詞也

物さへうしなひて涙にもくれハやうきことありけれとあら

もえ出ぬ折にしありけん　白楽天の心也姫夫人に帰すまし

くるしき所の称美とも也

ある人なくても此ことハ清少納言なり　ある人は夜るを

白宮よりも姫夫人文段に出でし梅花にも宇治殿

とゆくにそれも仕事する人へし

双枝門　あなたにちぎとある人なくても見そめし郎　仲正

開乃ことのさもいひしるしたり

家も持ちて帰へし　文集も姫夫人にあるへしの法師も立

行へと思ひさめ給ふとも也

わきてきゝうたちらくにもまて書きし中く心もとなきに

も知へし　かやうなれハこそなけれ後にゆかしき

うれ様すこしかきとゞめしなき御やうにくあはしき也

たく行となく法師も立給ふくしんにも法師なるし

給ひて此も仲く人のうまうしなとの人にもとなめさき也

ぬめへしとも云るも　弄筆さうなるてあはしく人も文集

も心にそめたるやうにたつる物とも也

いともさき給へるけれとなたれそうなる人なりと書給の様もあ

らぬもとさもなかるとや思ひしれりし給ふ　文集乃詞也白楽

乃るかとえうそあ人とも書給へとも姫夫人にとれあらし

まれにと申給ふく書文の人にしつくハ京にけるとも之

のあまたはこれらをかぶりてゆきけれどこゝろに
しらせもあらぬものをひとつかくれうちの大なるまさに
ことは文との心也
時く中君そ空を給　　白宮へ御返姉君はしらとも
姫君をやうやうのをちこちなれどもまてまれまて給へる御心
あるさまなりけりとなすくん御心まかせて御存さ侍り
姉君は一向にわが身なしと給りつの心也
まの情まつくハいとくるしかるく
と思ひ中達ぶかある山里ハ花ちりぬとの春の情まさく　上志院小将
なれあ給ひまりの給はさ侍らぬとも心よくまさなと給
らまなりしをかくしさも　文字のことゞ文姫君はとにや
中く心にくからしう　文宮の心也
此さりかもおもせまうしわきしもうかれしまうこれかなひ

ハうさくやわくましあと御まとされ給はしこる御あはれ君や
あなられさそ大三のそ奴給なる　姫君まきのかん御ふ
とよ給く八色ほとにおもくしさてとくもとふむのある
ましきにとも
家なされまくはしこ給へ出年なりあまる猶心はこくおもひ
て御あこなひ情のまりもそこゆきあるくし給ひおもとくめた
まりとく　文宮乃事とし去辰の年なとうすや御年八
いくいとも見ゆしきるも此祠なく八文のうを給さんこと
先出そあたるも妍すや
いそなち給い数あるとのこおほせも　八文めの残れ世のいそ
されるや
もくしなるみにかもしなむしを給ぬへさ給　極楽往生君
まします

たゞこの法をすゝめたまへとわしくうきつもなれ
　姫君達これほどこそ候や
法ん法よさきなきはかあらしも今ひと見えまして行りん法心を
後世のともいらず行人々あれども姫君たちゆへよん法をきく
　あはれ給との事や
きこえさせんや　源統(クンジウ)あるとも今ひ世まし　さとや
見るまゝはもとよりもあるを出ゆるを　八文字のときを此時を
　みまするのもとしさうりまとや
坊ほとけさまはあらはれとものめぐりくるも人をてくわし
うれしうみゆるさとぬくきそその人のまゝ心まふしそうん出
えんるとそひより出ゆ給あらしまへもとりふかく拝るし
てん　八文字のんや十念みえたなくともめぐり念も有の心れ
　またハ大梶(ガイ)乃行あるハといひなともへくてゆわしくぬとい

さのこれ薬王(ナウ)人あらそて出よりみゆる法ほとけ人めぐく出
衆の心さしあらはてうしろとなんちどやひらる抱わるべ
又文字を見てぞかほくゆるし給さんとや
ひと所く世に候つき給ふもとつあらはさ一紙とゆつるかたに
なくさめとく人さまを　ひとりも法にも姫君の御身にあつ
き給つそれはゆつりて十念みえまてとも文字のまつ
　さへ給さんとゝや
仏さて先ある心よりきうけ出ゆ給人ともあまし　さる事
　ほとまこと文字にひらる人かあすしとや
まつ近くみえられきたまもにもそれてとゆめてもるとも法へ人て
又まうくしれ人のんのもときひよ抱まつてのなさやとりゆきて
きのほとれたに給さるまでとたきしきそへけてさん法のふかく
あるのめ給有程あるとぞしきうるあらはつとうしきたまそてあるを

はめさましうて
自然さえくもあたりれんやよ入
我人も一句未若(ビジャク)れ人口なくさめよ猶ますまでの中やうり
れ往来(ユキキ)になさとありてにまししときもとことてもつ侍なり
くあまづくろしきやうなれハいくへもしるらぬや
なけれハくへとそれにてさまるハた
らへもし給ぬや　河　なまへしろのさかりてこや又な
とさるとて　なまをやりさ御のい
三宮そ猶兄くハやましきをあさ給はた心あるつさなる
白そまのるや
たらへさまやおりしらん　薫の昇進(セウシン)れるとさうさん
世れ宿縁のかりきれとも心やく中納言なり如給とれ
義なり
宰相中将ハ去秋中納言に如給ぬいとく自ひますされ給

行はうきみとも心みかんたりはまはいままとも思はれる
へくとたのもしみらへし　弄　当年の宮の宰相ふかく去河
そひ給へし去年れ秋といふ事とか二十也薫宰相まてい
去秋と云儀不相当(フサウタウ)のるや橋姫ノ宰相ありく三年ときを
河本ノ云く昇進の事書まし同時(ドウ)の事ならぬやと
世のいとなまたなへ宿をもおほえとなかりつる
させ給へし薫の第一有識(ユウシヨク)のるなるを　官位よ
いかな給事せいつきくとなもるとし　幸を猶未乃年也
なにと思給しとやいかぞくハ心とまく思ふんぞ
年ほどとも心ぐくおもうて　前の御のうに猶未れ年な
と思ふし時より弁尼がかたりし後を猶心ぐくなりしことと也
る給よそんいはくへ御まり思ややかなにつきのみくるなり給ふ
さうりむことそみをせまほしくなりん　・　是ハ猶未れと也

されは薫の心を推量れる詞也心をつくしもなるへし
宇治の大姫君をもとりまつりし給也　弄同之
彼わひ人とも哀なる推量をさしていはれたるなるへし
をとろくまてさうらふ心ちをとろへ給ひ給　弁尼の言也
そのことゝおほえはへらてとかくまうてさうらふ
しろと給也
すこしまうてくるをえしらうけたまはりし事也
宇治へ薫の来給をまちかたしきたまふ心也薫来り
給ましきにや心と又来り給と也
七月はかりになりにけり　秋の時分をいふ
都にはまたいりたゝぬ秋のけしきを音羽の山ちかく風の
音もいとひやゝかに槇の山へもわつかに色つきて猶たつね
きたるにおかしうめつらしうおほゆるを宮はまいて例より

色付るとはひかりのさし給く　花　これ此詞乃後に又面白詞也
音羽の山ちかくとは山科より宇治へゆくみちなれは
かくいへるや
槇の尾の山は宇治にある也秋風は音羽山より吹おろし給ふ
今案音羽山は都へも又近也まきの山は宇治にありて
めとまりつゝと
此たひは心ほそけなる物かたりいとおほく申給
八宮対面し給ふのなるやなととかうなれは八宮のこころ　薫之
ほそくおほしまさめや
なからん後この君たちをさるへきものゝたよりにもとふらひ
思ひすてぬものに数まへ給へなとおもむけつゝ聞え給へは
八宮乃詞也
ひとことにてもうけ給はりおきてしかはさらにおもひ給へおこたるまし

ましてなん世中に心をとゞめしや　草子の詞也一言別
ても掌中にても乃娘ハ好中らくさらかきしおくとや
ちらまをすまうちらく行するもたのもしきをたれわひさうなれと
思ふかはにちうん侍まても　まつさ侍る　くわうんぬ兮乃
草子詞也　肯也
さぬるにくもめくるひ侍らんうさうとハいふうぬ心さしさを御
婦しまつもせんとあんまぬうるなをと覚えて行人ハいでとうまうし
と物語つらうま秋ふ字ク紀相乃あきらうにほしぬく　草子の
出家は本とどゝきたるとも姫君を見捨まいらせしことや
心のむちうれ心ちさるに猶んといとあさましにてぬるもし
物語し侍　沛三字を退也
此比の世をいくるなりかさらん　八文の詞也都は有時乃事
ハまり行をぬましにかわしへのうちを草へうるを語也

九ちうあとゝつくりやうちふれ秋のほとり　九重也宮中といふハ
うち程くれ詞なきほど九ちうやこえくしもとまもなる
いこくのへとよむ為なるや
河
離騒曰　君門多九重　王逸注天門九有九重洛陽城
閶闔門西向大道門九重也
白氏文集曰君門九重閉〻
事
禁中也九重　私宮中是〻
ゆまへの所あるひのわりはさうつくひあむなる中にとのく上手
と物見しきうなとうくにうらわするを申まれひやうつし
やことくしなまりをも　八文禁中にわかれましし時乃
事也なとくししよりことゝハそまほりハおとつみ也
ましわり宮物語と申ぬ女御更衣のを　ましかなれ人と
わかれしあるとの詞也

清あるくれ　沖膺や

とのゝ老ていとまて見え

ことはなり

うちへかなさき給ふは人のゆゑに秋風のふく夜との

うへ丹情とかくは極錦そとや

人の心をあつめけるに心のはしを見えかいあしく人侍のうちにおもしろき出

たる物の猶もとさしにおもしろきは侍かうちゆの跡

此哥の此趣さて秋風のさ吹所人の心にまかりたるに此

名屑あはれとあると思へく人あは侍の存能見吉それもかと

ひ出さうさしるとはさく秋の月しもおほかりしとや

あふるゝ中にもまんあるまておほひのはさに心詞へく猶をかれ

さ猶かく人の心をとこうはくさこそひよきんあるへき

まて何をかひのあひくみもみすき人の色をとこうにも猶を

あとくと陵心よ弾詩

とや

ちまたは清さうのゑかみやわらん　螢おれ女の露ちり

いたのやうとこひあるにもとのてへいとしもたやれこ跡と見

たさしもやわらん

とんあまうさるとありていつゝひなれそくにさとけへきあも　秋すゝきのやゝも文宮乃そろとの跡や

松いとんくあしかりくへきあると　罪あるれまのくわさまつしき

とはいひをそて行へともれも秋の人あらりてこるゝき也

雁見たちれとあるへし

あつさのとにつきくの跡ぞる　世上のやうに八重あきの跡也

かくおほさゝんとむく阿しくいひ中へあはかんのうちきり

八重あの詞ある菫の心りとうるも世中れとくとぞあさの跡

やうなれとも雁見たちれさとみつてもおほさらんや

菫の八重あのんとといひかり跡とや

まそてあるきあやはくんみつのしれまみへくいのうみもしくかりて
さひしきのくらのほとあへと首ふさうれきことなれとてこまゆめつ
出心とそうむなくうれてこそはゆりうれ　薫の名んある
きりや芳のうれにみつくもんのとまりぬとや歌又まいつると
八万四千は遊のまゐしにそきこえてくふつり物のねより
めつる心とをそてうられとのんや　弁　菅絃の力をみなすくな
なはさひをそてさすゆきうやくや但人のとこくるんとまま
話やもうと
ゆうしうひつうをすいりのせうともされともやちうくまひゆりうん
あるとゆうとて

河香山大樹緊那羅経曰於佛前弾瑠璃琴奏八万四千
音楽迦葉尊者忘威儀而起舞　大樹緊那羅経法花文句廿二巻引　乾闥婆
王奏楽直得須弥震動大海騰波迦葉起舞云々

也葉さんこそくまりひしうちもゆうんや薫乃吉楽りあつるは
くわりのくをやとのんきうりゆうしうひつうをすいりとゆうと
う糸つかたその心也
ゆの住一てたはゆのしゆことの称をせうにゆりしうる経へも
その暁(アカツキ)寝し也れの聖と也もとは薫れの経也
うらくしうぬそしのあもとやおかはらん也みいりうのうらに
いつま経しせうなるくのうし出のら経　八文女のこころや
住ことに薫さと也見きされたようにとひゆへとつまたとなれ
そむるえうわとの心也
ゆうれうと紙そていとほのいのきあらくしてやをはひねる
大見の引経也　於　竹見引経と見えてこそ
いとく人の前あとむへてすて長なる家れうくなは心の行なまわ
さとなれはあまひの心まゆうつてわりしう如ほゆまえと

蕙の人や雨のさ侍れんへ古との行末もたえてさびしさ侍り
つまそめし此世の夢の世の中へて面白さとの人や
うちこけ昼もいとてうひさおきを行らん　惟ミさ此由ミに
て引捨に蕙乃いふそてう文引ありせんやまや
面ひさの琴ははいとてさし入ち行きんと惟光の言語や
とのつしかそうりなりしそめ侍るのさるとき　文字の人詞
や惟光乃琴をとりふるのしつめてなるも後ハ何となり
ともまりやそて八字こそ紅の侍まへりへ語とや
よこきれるとちうはゆつりゆのそてんやそて家さ紅の侍まへり
へ語ぬ　惟光たちれ行末ととなんとの人や思子なくまさ
絶まさひたるまのとくらつり文行末ち語りいふよりひと
こめたる人へともしつり　和ほうなく人やもさ
りき追ふくて蕙れ床ハ何まぬともと此一ことはりれしと秋のまよ

文字さとひ宮たくさの語ともも蕙にも一三なりきものり
語ひとくるにたゞもたのひ行りしとあのましくとひ語
との人をとられしとまさとてハの語や琴をと言へ手所まや
うく私たいかんもとこの子もひやうとうもおんとさの人目哉
こに思ひうもくめくくおしなとこりてとお目くもありぬる
う姫とそてうちたなれ語まくうや　文字の様も
いりなんせふり枯せんたなりなこ世乃契りむもへる草れ床を
蕙夜也　今此世のことハ中ま夜の侍来世とこと露をもま
しき契たるれハたのむしるとさひ語へとの露や
まくまのひなとお目やきこくもすこさよ侍てろをれらくはなん
おとゆうく語よ　蕙の詞や禁中にみてく八月よりまひを
としせらるく節会れしともそれるくく文字語ちんやうの
蕙のいはさうひあるへし　河　垂仁天皇七年戊戌七月當麻

蹶速与出雲國野見宿祢令捔力二人相對立各挙足相蹶
蹶速則蹶速之脇蹶折其腰骨殺之故奪蹶速地賜野
見宿祢是以其邑有腰折田之縁也
神亀三年令諸國始進相撲人

於
すまひは節と云七月にあまたはそれ〳〵くに立出給ふ也すまふ
の節会也
七月十六七日間相撲召給也廿六日内取廿九日抜出小月廿
又日廿八日召合 大月廿六日 廿九日抜出 小月廿八日也
続歌伎御人とめしありめて出給へる也 初ハ召合後にまくりに出給へるを抜出と云也
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

世のはしめ[illegible]ひらくハおしなへて心ちから[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]給也
[illegible]
[illegible]
[illegible]
薫の心也
[illegible] 薫の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

薫の大将へくるゝなひなきに一句りし文字よしなきよしとて
いひ給ふなりとや
かやうなる物とも中々うれしき花のみちにつけて
後とも情なきともかゝりなりくも物し給ふあらまほしか
注尺　姫君の物ごしにあないしへ給ふといふ心なり
あくせことなく思ひさかりもある給はんはさすかに口れ
しう給ふなり　姫君の身給ふ数ならぬ人にはかりくち
わしうんとの薫の心也
給ひたる心ちしあさとまうき思ひのほとにうつり給ぬ
薫の君ものまうてするこゝちする也
心にくくのこるとある世にあかいたりしもなとといひて
中の給ひつゝ心えうしさ給へとしてもろてんやあはれとそ
大将の家をも三代の物をもみちのしにありしまさんときる

あれはかくてとありしくは心えもそらしたまはまた給
父宮の命をも取りなさんやうにいはくるを薫の家に
ていひ出給ふとや
なんあきまあやうにわれをもんてとも言ひ給ひしえは見えん
しかともあしくてえられなくはきにあてうつしわたくしは中
えなりし給ふ　姫君の方へはまさ宮の方さうちゝ
ろよまもひく父みこも思ひ給ひと姫君にはまもいと志
つき給ひて心戻りしあさらし給ふるへし
おりしありゆくまゝに宮へはかへしうその心得えくわ侍くに給を
注尺
八宮の法をも出世よなくありしんあまりやかて言
心あることいはなるへし　阿　おも菩提(ボダイ)の門(モン)ふる人
ことにあはれ感ある也とし
注いのをつくる給ひかくも会仏あとも思ひわすれやうせんとあれ

して　寺ねなるや　又女のある人なるさ
見たらあもしゆうへきなるとも実にそは
まゐらんとて姫君達すわりたるなどの後さへしや
世のことくしてはなのおとのまぬらさすなれと
八文字の詞や世上の子らひとしてとハのおもちのまぬも
のなりとや
とひろくさむるこおりくこそうれしきやとさまに捕なりし父
こゆうる人をもちて心得ろきを子の法界程そもきとうらもそ
てむうぬいしなきと　姫君ふ涙ながらはわり給ひたりよ
まれうしろとのあはへそれみもん安くとひろくあまくさ世
色をまきなきをおうしまさきねハうちもそて世なく奴
語らんとはうなのうくらんとや
ゐまをとしもささなるとれとしさまつてをとられ実母なうれたるのや

にさん人さとらんうやくるさ　姫君達ゑ名残を惜しこさる
とるゐハ此世そうれしとみなにそれゆへ後世をとききまて
なんするハやくなきれとしや
何見なるやとさまにひとつる世お持うあんしろの事
なやうに同世うりあるうちをさん人さまは思ひをそかにいたま
しておらん後の子もとハそおすしきりのおさまとそさ
まろうんしろとはなうらん後といふ分をも何とくくと云絶
きろへさとふうちおかしねをワすかひと何も行しきもう語あし
めおそてるをたりおくしなゆかとはりひ給ふ　そくさ
姫君御訓（ケウクン）の詞也又女のひとりなるうにあしきと母すまて
面（オモテ）ふなりよるやうに出をとてもら語るとや母ハ大悲菩薩
うかりしとめたてれたるや
おゆらをのよ流ろありて人の事にうちあのめかはやささく

とはくる道理かな
随分有徳人なるもよしなき人ハなまじゐなり
さしも貧乏ならぬ人なれどまた山里なる人のやうにて
かなしく見ゆるなりとも
たゞ人は手づから世のいとなみにて何事もおもはしからぬ
てうしに世を隠してもいづれの人も 姫君たちて
人は手づからいとなみつゝそのうへにて山里に住
ほくさんとそれ始人とも
はさみにいりしなせハふとも何もすべき事の年月
なりけりと 一向に世ひとりてもぐやぐ一生ハ久しう
らぬ世なれハやすき物おもひの心也
ましき女ちさ始まるたゞ人こゝろにていふべくにとけしき
なるらん其のもの心をおもはれんよる人さるとの説
男さへ女さへりもしてとも女も静なる所にこもるを

おろ物なれハめでたくこそにせしなき人のまぐさ
物それらん有説なりとも
ともかくもよのなかんやうにて八想日しも今さら道にて
心にしあるやと道なりて世にふるゝ時もなし物思ひなと
物さはりかく心得そふ事の内おもひしことにつきまさるに
浮世さびしさもふるらん 姫君達のんや我ら奉のうち
さいとうろ又言ひ行けどとくれなきてハこれをなう
へましなめでたうやうしになりん後のあはれしるを
の説はいはんのまゞふとも
心のうちにこそいひもて行つくめと内書かくうにある
といひかくしにつけ道ならん世はしらんなど程とき
ようしめしる人さきの有様りなん世けり
文字の心
を姫君達の世よ心もいはんのうち女房世中にも侍らしめと

然も文の道にいひなりて織よむ筆給ひんるみと
ありはしるにんおしねどいは行るすくも文字をとつく
文給てとは御けるとも又丈給ひんはうしめくらん
とるすり一統はまはしみ文は心みしねとくハ文宮にんよ妬せし
さ給ひんなれともしにつくなさらぬなねとなれや
古しいりてそうりしてさとや
あをいう給ひんとての日をさいみしもここなしうれてたく
ここありさ給ひく大給はいて梅たるれくりそめ此やうり
みくをくい給ひるはもさぬの有給をみしん様りの心
てうハ日うれ人のたくこまやてハもくい給りんとなるさらよ
つく給んもし給さ梅いてとこさうめをなり　山藤し
給ひんとて此おの日此文字此ちさや
妬となひゆる人くめしけそうしろゆもくはつきまつれ

賤業者のこととうしろうの人くよの給ひとくや
行くりも花ものやもくしは学のし有ましなとその人を
古点乃妬さろ人もはものことみくまき也なへあり
人を給ひなしぬそるさば是此道の志をゆくもうへの此
さら人をゆるみくまきられいろしうくぬまのぞとや
う序をらにるすりぬ也は人を日本ももそ行しめとくちお
しうてさも〳〵ん契りうしあたくいと相しおぞとなん
おほうる人さ　文字の指姫のるや人も行くもとうし
なれとも気を通おしくさもく人あるやうるれだ
かうしあたくいとおしきことのおもわりんとや
まのさひしもん心ほらむ文字を有る人はまいのことや
到んくれ神みく世にみ給ひしとハ文りしるしうくは面く
乃まちがひ一定すとや　所もし例おる丹しひや名誉

後見(コウケン)するにも能也

生れたる家れほとゝまさりてのましく思ひすてかたく、なんなんとして
見くるしき心ちのみもあやまちなくは哀ゆかしき
人をそねくそめつる分際(フンザイ)の程とくは隠して家の名をたてぬ
なまじひにみるも安からぬ一ト筋又わり心のみもあやまちなくおか
ゆるべし也

みさをなくしける人数めかんやとおもふとも是心より外にましく思ふ世
とおもふは皆めくろくしきゝよみぬるにまさりて思ひ安ゆか
色との縁にまよひ行ゆるなは心て縁ふとそて色　姫君とお
まつはまりて契(チギリ)あさく見まかしく色さかんとおもふともそれ
色縁(エン)ハ行末まてなみたなれそゆめゆく縁くしきこと
となし出きて家との縁ひとつくなるへし
こなさにはさるへき行く　姫君たちは慎み又女の出也

おもんはかりなく家を相続いたしそ　又家の相也又家の寺
にいろいろ縁ほとのよき其の縁也下れ心のみ安此故
おんてとよそひ縁をなる人し　なんをと座りて
心たちつと是ゆりて行えひ家とへし縁人
あまたもるとへし縁ひさくなくさを縁てとや
行するもそひよう家にましきせとお程しいまそるもとくるも見
うちふくみて縁ひぬ　世をとやくやうるあなる在り
さのこみはそひつき行ひそふそて出縁也
さ深くとく心ほそく物思ひつきしまそておふみなしうちかへさ
らひて　姫君是背れたるも也
ひとつとく家つましくへいりてくくさまし心をゆくもとなれも
さくとめなれ世なくさし　かるくやうともあくへ家とさをさま
らひかんやうつまとも　まみあるととも

古　そでちるひらをはかへくるしもあとも雅より人へて夜ころもきん
ひら　此意詞をも見くもちる也
弄　名まをたつぬ人の盛夜をきんの意あるとの詞なり
彼おこなひ給三昧をふもてねんとひしくれもまちをや給
おのれも四季をよあてく七日ねこなひ給念仏三昧のこゝろを念
をそてねんとへと曰七日にかくるをや時宗たちれん也
河　傳教（テンゲウ）大師云以諸方便楽寂静一揆心於彼得三昧一
花厳経　我於仏法中一念一行三昧不謂念仏三昧也　是も念仏を三昧と云也
弄　念仏三昧也　宇治ま二流よ此詞とこの面白やありしらんとを
夕暮かん人来りて参るすなやましうてあんくるくぬ風
つかしてとくはくるにと猶もるすたもんたるはまへうりを
そこいめん心もとなしれをと覚え給へり　又亥よりも時宗
一際彼家くや又官乃詞也風つかしてとハ新風のことちをと

しく春性し給けんにとしもくの給とも也
むかし法文ましく心のあり給人とおほしめ給ひ　時宗
まとのぎやことは法文まてや
法もとも申ありしてつゝさせきを給へくあまれなとし給ふに二
三日ハおこなひ給たる法心のふかく心人あまり給へとしにおもろく
しき人ハかくしも性こそ又くもしく給しうなんととしも
よろしく念しへ　給ふくとえてしめてある人来しせしる前く
也なん也
河海抄人丸　志かのしの日れ法くしの錦八分まつき衣とミよとも何くれ　三西
今経へしてあるとこと聞ふくうちに給ありきるものとさうとくひく
法をくまつりける　澄（ガイフン）春性し給くの給へんのん也
それをも法なやとをみ西のかれとうくるをもれそちひなるもおりしまほ
らん見てもちれをすなふりおほしなけりくへき　何宗

楽の調也さりとてめでたき姫とは見まゐらせ候へども又彼方の
ゐ中くまし給の気情し給へるとき供なく仰せらるゝ
人をみるは心もなく物といふものゝごとくなれども前心よりも給へる
みちおほしますにもいふよくおぼしつなる人ことごとにとゞめて志
らせ給へ　あくせんはゆかぬ物との義やおぼしつ
ある人ことに姫君の御ためを申し給へ此世にはなのとは思ひ
たれも皆給へとや給也
ときさらに出給ふそのみさめやありけるに八月廿日の夜ありしが
又おほしけるの空れしさもいとくらしおこころ　此頃ゆく人
寺を出給ましき中に仰せられてみさめる前也
見たまへ給ふ夕霧のかなしくまうでなくおぼしありけるをつくりて給ふ
給ひ前の月に花やかにて出べくるのおもてにもさやかに
せくらもら給ふ　人のさまをゐるやとぞ

それさの気とくゆかしき世で見ゐらせ給へるに心の辺りをとゞかり
ものまで　寺のみゆるさの声をきくにも
鳴ぬやと鳴ゆる夜の人くまでこの夜中ごろそれなんと
き給ぬる也なくや　寺の鐘の声の鳴くに成る
空も給とや　聞るにつらき給ふでなひ給る
んあり面白羽織ひや
心よりけてゆかしくとはさらに思ひ出で給へるとうちさき給
みは何さまし見物おほしぬ心ちしくをかしくとゆは
姫君の心よ何とう於りしまさんとし限りのやとは前く
見気給（カリゴ）し給ふるくとなくるよしとうちさて給き
あきましなとや
なきらもいつにもんたくいかく給へりいかゞしなくと
も見るめ此まへあらく　引事に不及也

泪

史記曰孝恵帝崩太后哭泣不下　呂后本記　顔淵死子

哭之慟　哭ハ泣ともいへ涙おちはべるなり　欲の切なる時子

こころこそそひつなりとく　杜詩云鷲完却拭涙

給はされたるは世の中く涙ハおちぬものなりところそ

けめそひとく時わかれしさはおほくあるべき物也杜子

美詩めもまんと飛まるや

おもひなりしぬるそはなみなるまと思ひつきあさそひく

わけくあけくるわそとうちもきわしあくしもとくまかりて

世はあるべき物とおもひしあくそぬ心ちともあくゆそくれ

とくれしとなれきつき給へとくさうわる后なりくれも

あふのひるし悲きとしちまるをとれ行ひあるまく

くりのちの泪しとこともす給ひはなけさる　ゆくな后う

あしきことも眼前あくあわなひ給へもいひしなれあく

ハなみだともハ孝あくあるなれハ心もとあさのそかつしや

なかれつりるかり給てしん泪様なるとそ六と一たひ見ぬま

らんと思ひの給ひてと　文宮のさるをとるよ見ぬまかれ

とぬ姫君のちれぬや

今泪しふあそうさ給ひとしく待る人な　あさられ翔也

目泪もし父あひき給ましさてと殊宮のきとせつま后今人ま

しそかなく泪ふんとうの給ましさ涙心つくひともあくひ給へ

こさあり宮のの宮の由　文帝ふうきくの給ぬさんうしと日

此の給ひしとさん人あさうもれ中とふめ給ひとくハまりして姫

君ちもきたるひかりんをとうめしとんつひし給へ中く

泪うしとも泪ふんもまくしさうき給ひや

おりきしくるの泪の有様をと宮の給ひめともあさうれ何まかりきうし

こさひしつきんをとつたを泪しもくあんおほひし寄る

寺へおりさせ給ひてハ七日やすらひ給ふ事もあるへしよく〳〵
給ひんとの給しけれハましてあさゆふのこゝろにかゝりさせ
しによれハとハくゐりて心ほそく姫君たちにも給ふとなりされ
ともいつくへか行へき御ありさまなる人々しく
時の春秋あらたまる心ちもつきせぬ世の中にちるすかたり　冷泉院御存命ト乃
をしへしをうしなひ給ふ也　父宮
へたの法師ハたゝ世にしらて心にくく思えけるをいかて
出家の法師ハ八宮をもいへるなり
いかん御つゝしみたるをはゝかりておもふことのあるとつゝまる給
八宮をうしなひなかしへの心をまもる給
とたのまれすれとものこゝろにかなはぬかへらてかへり　薫子の地也姫君たち
御命にしたかひ給へるにさかゆくもありさまに給へりとなり
よろつの事をおもふをのかたにさへ心もやすからすまさりてかなしき

宮ハ給へる段のあとあるみちなけれハ　宮のうちにとよむ法
給ふてみえとしあるへし御心にかけまつる給ひし世の法なれ
くらしに姫君たちも御心ゆるして世をすてられまうく
おもひ給ひしとや
さすかたち給ひもえたる心よはくもかなしくさまさまおもひけるも
父宮のうしろやすくし給ひしとも父姫君たちのことく
まことの御事をもこまかにあつかふ人なきことや
中納言殿すけなく給ふつゝとあさくちかくたちかはりていま一
たひんのこゝろやすきへかりあることをおほしのこりそなる
ここちしみちのかくれよの有様をもひとつへもちりてゐなし
うちの給
薫子の八宮逝去(セイキヨ)をいとゝしく給也
父あひおもへる事めつらしくやあるとの給ふしと
対してかやうの給ふものことわれん也　八宮薨去

於はしましの御心ちにもあさゆふおもてなしぬ世のうれさ
とへまりきたるにほひくしく見えてあまたく　八宮八ふ
だい
乃今日くゝやうれさ世におくし語源氏たまはた文も
あひうしあとやの語しも書けるよと耳たちれ宮御
詞なるとの薫乃心也
此日うちとにほふ所りある紙をくわりそわりくおほさる
河さうもの事ともみも見えてち此源とすくはも
古
はやはゆくなとふくとゝ宮ひくし此日うちとはふぶ所りしと
うまうやうに宮の語　薫よりと何宮乃禁つも姫君達へも
匂よの語ひつうちはしや
うかゝはとすくひあと文ととつ連宮ゆる人ふたにたまれ此御
植あまそは梅花ゝぬはゝちともにも年比の源氏の人の哀
あわりしるとをとも出しつち語　何くとよりもすゝ

ひ語くらのうすれよ薫乃やうよ宮のゝ語と梅花のし御
なぬはんとともははもられしさてとくへお作しめしたるとや
よめつもの間とれおまにゆしわりうそて八文年くひるれや
うまのこみなくの言ひそと梅たなめる紙あてくさむらさあけ
なる源氏とも身くゝらやうよりつちそもし語くんとおか
しゆうつのらは御さあとあるくさるよともとしそろうと
て何さりぬもとすくの語てすとも於の人ともにぬさとる
よ語てはもと語あるとの事も思ひ中りしし語　たく
大くされ人のおほきに出語あ梅あうにまゝし事も八たよ
つまとたす此御くるをかくゆやうある御心ちりし語
らんと薫乃よしちうり御て梅の源とすくひるとし語
あ少文ゝもゝまとゆさし御てあさりうとも文弁此尼うるも
よとゆるとるとし語く御うかさるうゝ宮や姫君へ由とすた

一 きんなれとの心や
たのまぬ秋の心ち、なりける九月なとも有りぬへき山のもみちまし
て秋の時雨ともさそはれぬへきなとのことはりとおもひおもふ
木葉のさとらともかしこくなとの御の御胸をもひとつのやうに
くもとさらひく　姫君の関をのきさやうなるらんなる
世間になるとの御や
江 はかなき秋の心なりけるにやとありとおくそなからひし色ハさらさらや
花 人をまつ夜の関ハたえてせぬさらにはてなぬ秋の心ちなれとして
秋 あけぬ夜ちしへのさへ言の中なからんや
くもりてハかくてうかせとはるとはかしく何命をもうつりめくらひ給けんと
さらぬ人へのいハんほとくらめしくなくさめゆかうつらくまにふ
姫君をまつりやうにも悲傷にかつら給へるハなみにつらへ給はるき
まつりくうにかくさめ給へきとや

うけとも念仏の便りにおりしまゝし侍らは　仏とりくさにまん
まゝりて　寺ゟくゐのまゐるハ中にも夜さは姫君の御方ゟく
とも中陰し給とや
時くはくまつりしんへくなれ給つゝにさまつらさたかくさまつる
はつれよおもとものくもくほとまさりぬるをさまつるとたとひ侍るを
あくいまみを給さやうれにゝをおもともなるとかんなりまし給つきてお
あひくなけれは　前ぬもとまら給て親子なるともあるしくて
あや
中納言ともちらうしもおもしさあるかたをとハ侍とひきあらはち給へ
るあかりとゝうしめくしおもれは　白君の仰よ姫君より御
女つれなきれた慰めえくやうにおもひまありちてある侍
まつきに秋なと流れしもなけ世ハうしろめくらし給とや
なきあかさくうちにかもとまくしをなれんとて出立給ひきと

白氏の心やあわり物懸へ来隠し給ひし下心は姫君のゆく
へをしらんにつきてうらみ給はんとし給ふとぞ
ゆくへなきは又宮遊去し給ふへきさやうの給はんとも
め給ふとや
かくこの比ゆらきれ法ときこえ給ひんなれはなれは我御身のまま
つまそこ口惜しくきこゆらん　姫君乃御返の打ち給ふとあり
法のつとめもなくてぬかきこゆかあまたそ深しもひきやと我御身
つまつつかお口惜くきこゆるき給つりきこえんかちかる様なり
くさ　つとめもてなきこそ姫君の深き御心もかるさもや
白宮より又つかはしたりや
さらに姫君山里のかなしみ小萩か露かかく紅梅かさく給
白氏文集　京乃庭の萩の露ともならぬ給ひくらす宮はの山里
り廉　とりあへずとこそ挑まらひやり給ふ也

それより今は此世の御事はおほしすてぬるかなしみんともあまたり
心はなくなくてこそ有べかりけれ　白氏の文集也　案摂なる法
ハおもしてまこともなかめ給ふとかやこれ打ちかへしたひたりて
とも有べきことくなる也
うきゆくのへもまた給ふなきかぬ宮ぬ法かなんなるをおもひ
思ふ文字なるへし御かれしき法とあり
まにつとおまへの心しのやうふくたひくまうすゆるからぬ給ふ
と申さし給ふへきと　姫君の心也
中の君ともこの程ふしてうきをなかり給ふ　法皇の
何事ともうかや君をそこのくし給ふ也
きこえまてあつくへおもふらさなとらくひさまに給ふてみるへく
さ給ひとやうのひくゆかりとこもこれよ君かう白の御返事とおほしたに
又うらむるをおもひぬる心ちし給ふにたいにつかりてなに給ふさそ

うき侍るましきかれ　中院のんや
やうくうれぬふとし連ぬとし侍るか前ふ限の月もなくにて
とおほゆるもうち侍しうしてやさらうきなるさまに
なれきられ候あるなりをもいとんしわしゆふ暮れはとより
きけ候はほうひ　侍るか　此うたしハ哉といふ所ありや
慈傷と云物をも限わるものそとや前しまするひて歎のこ
ねくるも今ハいさくうおもふなくらくとの中院のんやし
侍るやよすとをきらさくをたにとすむへし
すひもそしるそくそおもたる　京より宇治のちくと云り
いそてり色うき事んこまひろ猿猴しくとりうを行へと
妹元のよしもつき路へも心をもつき路もんほとは彼よ
こすひハたくそきひでずとの路や
立るへりてそ茶の前あめやさいそきをいと行しうて我さうしうき

ひきいめ路あは何しく行と　彼乃網も秋中にもきり京
へまうりり色くらんとかや
見わうとう花ひ路く　大原乃ん也我やひきいめそるよくくうさ
名れともも中院の前しきつを行とえりつて近く路とや
深のこもうもよさうま路山里と節乃庫そるうろきよろく
大原苔　此山里の慈傷乃於そは深のうえくうもとに節
行庫さんへ立ふしくて我なくにおすをそろそうやのんや
くろおもうこにすみのもとくさつきもそとくしされしもふはく
ろふ雨もなく第にさうそてくそとこそいりし路ふ山の浮
はうひと　聊元の客の木まはそうもとと云りあそくなる
花しよるれ雲つぎたとくしおもといろるとはのたるき
さも肯ぬへしぬや
こてくさ山乃猶もあもよにおそろしされときやう乃まのそち

さゆしきゆやうなりとて給ふらん　此うたハ例乃てにをは

の字や

（後撰）三笠山さしもあきらけきよにいてゝしもやなとよにしられし物と
思ひしるよにさたまりとて給ふとてもしら給もなくうち
なやめてある河かけりつきぬれまん人はめしきもいてくぬま
てまかりなまはかなく給ふ　たとへの藤原（サハラ）志けなりやう

のすや　歌のうたもなれや

（河）藤乃くさりひのくる川かはとめてあかしかゝる人新こそにかゝらん
（花）八雲おこる出雲たく藤のかひなる不や
（弄）志ろしれくへのなかなとて又木幡の山かゝるハあまとなとの
なとえひくまり藤ハこのたき山のさくらなるへし
されく浮らんてしかはあくぬるよ此ひさしもくしもとゝとなひま
かりてよしつきたるを思ふるとそこかまかりまあらんやう

ちとせとのまとなりんしはくとゝみともおほとのかまし給ひ
前申さ中君乃御なし給しかはもの中うちくひあるまて自
宮の見んとつめ給ひも更背此御よくかまとゝもよれなくさと
のんや
まかりとてわきをかけりまし又浮くんとするきとのなさしまさハ
のちえるとゆゑな志らさとおもんとおほまん人なる人くさく給
こさかのとてみくるかやも　宇治より浮使の御かくと給給ひ
て自宮乃かきとくる給ひ又御なしとけらんし給とて
秋をとかくし給ハのそくゑなき秋心乃人なまはかやうかはなり
そとんてきゝめくかや
給へさなれハなめりまゝ給ふ方かられぬとしは人のそくるはさて
此給ハんての給へくるつまりて自宮れ秋をとかまし給
とてかくまありかのこと例乃式なる批判してあるや

なかり給

又白宮すまひ給へ参りや君の文かへされ給ひけん

こまやかなれど心もとなくてまゐりけるや

給ひ芳りなまめかしき給ひ麻の葉紙大かるにや夜中もきく

白氏文集　姫君の文字よりよくまゐり給ふとなきさへかな

ゐをとんこかり麻の葉とは姫君達のなつかしさをたとへて

いふにやそれ竹の葉紙白氏文集ハ大きなる字給はぬとや

（良利）秋たちてなれそむる人の文給ひて心にかなはせる麻の紙かさね（良利）

まつこのハおもかましうを何まで

あれ姫君の色かに藤紙そえてかならずまたなくいとよ

こ給ひてとりけり白氏文集も姫君よりこのかたに給ひま

しことすまの給へり

行まり精ぞくもう給ひしひところの院のみかどかくれへた

る紙のもの深みくさてなさるよしみちさくて色じ給ひん

よりほかにあらし人々あまたにならでさはすさまじ露のくきもあ

らそふうしろめたさけまのを給はしとくめりし

姫君のみや白宮よりもつやうに宿とてわかくさ給ひ

色あしくもう給ひさかりとにいひ給ひとや

なれにもまさんまゐらせはまさをなすことあへくつとつまはしう

おそろしうて宇治給ひなと　藺相如趙璧（リンシヤウジヨテウヘキ）よりもと有とい

ひし玉乃きはとつたまるとみゆるなる人し藺ハ名相如也

宮や趙ハ国也璧ハ玉也きんの出より此玉十五城にかへん

といひしを藺相如此玉をとり鉄（ト）でのかんとな

らぬ城と給ひてよるへさとしせとかに押（ヲシ）てたまんと

やし時玉をとるに色あしかりきすこしるをしたるを

宍ぬはさにたうしもうとにかり此玉を卞和（ベンクワ）か三度

さゝけし名玉（メイギョク）や

ひと江の御契りかくこそ有けるよ　又宮の御うちと姫君達の思
ひやおもひはたる事なとも露ばかりも何かしだし又たえのこの
ねく聊尔（レウジ）なること有べくも心えずとなくそのたまひし事
ふまたゞひ又なく姫君は魂（タマシヒ）もきえつきんとほのゝ何る
ましおもとく此度は後の給ひし給ひぬ也
此文あるとをいふうれくなくにやしなくてくの御ためとも思ひはりて給
もは　白文の事のなすゝへし姫君達も白文ありとし
なんてのへ人のやうやはりなくし見れどもの給ふともも父宮
の勅言（チヨクゴン）ありてもそて聊尔はなはす給ふましられど
疑（ミヌヒト）人ふなりてもなくし給ひんとのむ也
あけのもとにきとろ給ひつる御すくはうひことの気色も打ちしさゝ
まにあさめまて給へつる御事をなひと　なきれとまくるを
ころ給へつる也へたまはりにうさ給ひぬはうひも白文なるよ

跡の見ゆるすらくてとくとこそ申しあくかくは御事をひとつは姫
君達も見えさせ給ふとも
何事にハ見えし中給ひし事ともこれをそはやめてたゝ文あふめれと見ん
給ひあへるそのゆへくしく見えあまたけあるにてとくすまをせ
申さんとも　白文差の御かゝらせ文あると多く八見給ひし事と
ともさま申とも此も跡の見えるすゐ事なると給ふとてもゆへくし
見語らさらそハ申あるすると八いふ給ふましきとも
侍るの御かた見方の有様とも有ましく侍　姫君達の御気分
みくまつりそさきは申過るすゐ事とたびたびくわんとは
侍さるす見てとくやひえ給ふとも
あふら御山へうしたちてもろくしてんやとおもふには
姫君達の心もう白文人は申まても中給ひてさまざまくなる
山伏の御心のやうにあるしてもくさせんとも

中納言殿の御心ちかくれなきとハかくれなき事もまめやかなる御さまなり
宮ゟ給へる　薫の御心ちとハ姫君も心し給ふと也　つらき夜ハゝう
我よりもたびたび御事にまめやかに宮の給へるこゝろ
よろこびも打そへつゝさるゝ母たちおりかひ給ひて御文つかし給
とも見よりもとハ姫君なり也
見よりもいとまうこゝゆれハ何しても宮のこゝろつかひ給
御経ろうしき心也　河氣非こゝは
御つらさて宿ともみつゝまうて給へり東乃ひさし此らくる事
なるゝにも御つまりて打給ふにちかう立より給へく
こうしまうて　薫乃宮治へ来給と也
見えし乃まゝし此　姫君なすれた中屋にて渡り給ひて次
かまに御つ達打りしまほしと也
あるる人めしにてたりやうにさひ給へる御所くりにいとまうそ候

色
薫のちかくよりて弁尼にとひ出し給ふと也
みちひみちていりおりしたまはゝかりいらさうて御いつし人々
とかくもたえうし給ひて日えりやうあはまて御へ給ひて
姫君のやうにまとひ給へる所かくれ人薫乃よそり給へと
年くとうてあかのもんとハかひ給ひ日とも生ぬとして
かうそしき人なる人し
若れ御ん心もまたにたかうひ宮の給ふさん御ゆなんして宮のとう
あ給ひるかひある人これ
文字乃の給ふをとこしことくり
隔心（キヤクシン）しゝ給ふそでおりかひ給ひてこそまうひ有へされと也
なりひきしなとえこゝある事なるまうひと也かひ侍る勢もひ
と御こゝあるゝ宮のと侍るはてとの気色もつゝみて伴ふとやかに何通度
薫の我ハ事さうひある人に為くひ給そなとと也されと人
侍るとくみくハことも気色も涼しまでいとや給ふまじきと也

あさましかりけるてあつしく侍やうなれとよそにちりぬらんと
こと多かりまとはれ侍らん　　姫君の詞也又まよひ行
語ハたゝ夢中也やうなるとの心也
心さるをおに雲乃光見んも侍らんも待しまちてたちまち
うつもえ見えしろ文待しぬと宮の行へ迷　　賤の女か目
月の光のかりもおもしくおもておほくゆくへするへし
おもくゆくへもなれはてしなれはよるのあらん　　薫の詞也
あはれにうかへるとをいひなりとていふ也
行やみくにあるといふ所也姫君のことといへり　　花まつこそ
心えといふ心也
月日乃影を浮かへてそれしく待ても出るさま行かうこそ
涼しさも侍らぬゆくゆくもなくいふきうおほしと侍り
宮のへの乃詞よ宮光見んと侍らんも深くまつと白月

まおそれ行やうに薫はえしらうちも出あひ語をぬり
何くらいへる薫の心也月日ゆゑも姫君のまれと出こく見えり
にあるを語りてて秋脈君の物をまきと消へこれ秋姫君
の悲傷をとりて思ひ余りたる心なし此切ある秋歳しみて
そしらく出語く月日よむかひ行えん物は何のとが何
らんとや八薫の行くへもなくいふまほそうり
かりの心まてもれくし　　秋への思なれ待さまこそ
こ秋とも
又おもひさるらんそしらぬ秋あはれみ宮のたまはしくあらん
心やゝ行へえ　　姫君たちれ御心のうちをおもひつけ語
てこそ何さるもし語えんまれとや語也
まにてそいとさまくひなきとなみ秋ありけるをなくさ免
宮の語はんる人のあさうしぬほとるとへ宮こしうまそ

女房達の詞也　弁尼も有へし　姫君のまことにもの
くるしけれはさると薫のやうにたちさぬ給ふ御
志(ココロザシ)の猶ととまり給ふをぬかやとくへこの姫君にや如へし
法の中ちかきとさへやうへやうくらく志けるまゐりてよろつおもひとる
達給へも　姫君達乃心のうちやへきしをしらぬやうなり
以へともやうく志給との義也
むしろなきかくもりかけまてきこえるけなくはたへいとわきかうり給へ
る心さし命ともさしてき給へし　又宿世のこれにかやう
まんとも如何にも薫のえるけもの野山をもみ給ふ又
女君達の給ともうへいくてなくいかかりし給へき
とおもふへはまちつきてまつり給へさしいは姫君達をとひ
いり給へしやとてめたる羽双紙乃地の批判よや
まうしつきまりて　薫のさ無也　秘　姫君

あるはいんはき文の給契しことるといとこ㳒やうにわかつり
こゝらひく　薫の詞也　姫君のうちのあかしき代なし給ふ
ての給也　又乃給契しこしは文を姫君達のことを
薫のり宿世のこ給よしの給しこともかこまやうにたる
のま給とも
うてわくしおもえひるとも見へて給えぬ人なれと
姫君の心也　薫ハ思(ツヨク)としさはきふくまつりしまを
なれんとや此の次(ツギニ十)背姫君の心也
きこしこくきくころもいふとはいかゝねとあふぬ人よりまゝあ
とこさらきなり　薫ハおぬきつくく文をとくしさはり
あるる人あくはおわれとももとくろういたとは心なかしは
たるへきてはおもてとやされとも訓(キク)聚(ラウ)しておもとゝま
さむことはきつし給との姫君達の心也

もと給はそのさうわするゝ事とも忘るゝ日なくとおもひけり
くれをさふらふらふるしうてはべりしかれど心のうちに一夜
なとと
文宮の薫をとめのこ給ふしの給ひてかへしをもとへて
さうしきとも思ふろ見る文字の薫と申給ふとの給
しきも見えさせてくはなれとの給ひてわちかれ給ゆへなる
なし
いくへ中々給ひ夜のきよみいふひ心まし給つる事えひあれ
ものうく義と中々まうし給　姫君の御かたと薫のえんも
くろき事にかとえけんく給ひしをとなるたまひし見ゆおもえは
らんかきよの見へしいかもとく遣おとおもひ出しまて
中陰のうらなかきもまうしておもはんき夜とは事にかれ
うちをとひゆる御事や御の見へし御音とはおもひ出ゑふ
御事は琴給ひを給ひ　姫君のうちとて薫のみ思ひ給ふも

多くの淺茅をも見くもも雲深くや降るらん神無月ひとしきそ中遣
薫事　西の林やうつくしきけるひぐらしの行きちれをと
のうちの御見へく姫君の御神かは雲深くやの遣給て
くにのうつろふをとひゆりてゐるも
やひとりさとのやうにの給ひて　いかにうち思ふを姫
君人まいるをとなくひとりとれやうにぎし給ふや
くらかの神かく夜のやうにそわかそ行くふ遠からむかと
大君也　いろいろの神とは服えの神也至神は目の
おもかれやうにあれとも今文姫君は見えぬ遠くとも
さうしや御見ゆおわれれかく面白事といふ
ものくいとゝとも思ひひ出ていとゞ心うしく思ひ
くちけるひとくいう給ぬなりき見くめるともさ
はくめともし給ひしいかにも義りおもかはれくそ

古今
前ころもちるゝ糸ハくむへの涙乃玉れとこそなりけり
こゝれさはかりふかきそむしとこそいつゝあるまし
きはふかきことも定めゆゝありかくいさまし事なる事も
なとしみさる人なりなれやうあやしくなとろ人あらへと
もおもらしもそもをはいてとなりしうるゝひ給
こゝれさはかりうまた　惟光の法代よ弁尼乃出くるより
あそぬとの薫乃也
たゝかくあさましき　薫の心也弁尼ハ柳本氏女三
宮人客無乃るりるをともとかくさる人なれハむかしの人た
れをとくくなれとも白をそてはなつしうそひてき
らひ給とや
いそけありし後よ薫をそくれなうていみしうなし
きえの大せなりあかさともひとうあしく　薫の詞也

おとこさなりし時源氏よそれを給しくあるかしゝ
かしとや
人ともありゆくるゝひよそくてはゝさかる行世中れなからひ
をなふともおほしてなん　薫ハ官位のたかくむともに
ともそひ給をぬとや世中れなからひとらさ薫の人ゝり身
ひくさ威勢のあるるのや
たゝか志ゝやゝなりし事を成るあとの心よううすひ給へりし
なと　父宮の閑居し給ひさが薫の心よりなひあろとや
かくそれくなかしなかたいよくいみしうそかなめ乃世
の事ひしらるし心と
まよかさまにそまれと　父宮逝去れるや
薫の遁世乃心をもよかされたるとや　八宮れなくなり給すていよく
心くるしうてさまなよ給へる法ことこと此　惟光さらの

又文なりをとるを結ての作も文なるを詞心中の結盃し
なれども人隠遁(インドン)してはつよく此たちのあはれなし也
聞しみと申すらんハ　姫君達を薫の見てしのびくやん
相しるすなれとも薫ハ文箱柏結の人ハほくし
とこそとの心やこそるみなか弁尼よりかくり結也
うきくしさやうなれとあらく人こなと　くけまくもうし
世の心見えて　花のくはしぬやうなうへまや下なとに詞
前河海乃統也なりけるなりしやこと　此　姫君たちとおのる
しとかるさん又契とうけたるやうなりける也
うちはるすあやまるは　文字の柏の此書ことをそよくへし
とて薫ハとと出家をし結ふぬとや
申すらうを結ひしまれし見らん　何事すゑくとも姫君
の法用なるともを結本見とれ心也

法の師は相伝しなれは此弟子の絶て申のしよりをいてく世中に
何とそとめんとも相かくはなりのまにやりやとうちるすれはうく
の結へと　柏木はと成弁尼のきるなりしことや法のなく
をさそてハのかのや相伝しあすふとはせひのかのなりお心
まや
此人たまし二あのみしなをあさまてこそと申てしやうを
弁尼ハもとうあと一人あるとや
法あのひあとの弁尼それあやも相伝し給り
柏木よみ結との弁尼か也　　薫
弁此うちこそ達たちつるかゝし人の法くとをさ人とうかさねて
申しやうんるとあく　　柏木とはるのくへしくあつまく
まやかくこれあるは薫くと乃あまくまく仙給人々文
とうかき給くかれしさとの弁尼か心也

物がたり給へるなるべし　弁尼の年よりたる所さへ
此人ハかの大納言の御めのとこにてハ此姫君達れく
御めの母かたのゆかりなれバ大中弁のゆかりある也
けりと一
この詞ハ弁尼の系図の注あるべし大納言て
八柏木の事なれどこゝもハ弁尼ハ柏木の御めのとの子
なるべし然れバ弁が父ハ八宮の姫君達の母の御方の
おぢなれバ伯父とぞ申さバ弁と御ゆかりのことある人し
又の宮ハ左中弁まで物したる也
此詞双紙地也
年比すまふもうけたりける母君もうせ給ひて後
弁尼ハ京にのぼりしるなり母君もうせ給ひぬと弁が
母と云説あれども姫君の母君可然か　河海に京都云母
君とうせ給ひて後ハ弁が母と見したる左中弁の詞也

かうやまひたりけんやもとハ宰相の母君とは宇治宮の
姫君の母なるや彼弁尼ハ姫君の母なれば母方のおぢか
おぢ左中弁なる人ハ母ぢ方をきて後かの大臣のうちに
此姫君のうしろよりはじめける也見てとりて
かの御母はやくなりこの宮を中々年月過てありせ給ひ
なり　柏木の父ちじの殿とぞ人ハ弁がうしろをしるとも
人をいとほしとおもふも京に人なれバそれと心ゆかず
らぬ事のうへを物かたり給ふ姫君たちのかたりぐさに入る
あはれなる也　こゝもうしろを切くはしくも
此んとおもふをもハ弁ハさのことに思ふある人さしてあり
とおもふほとや又宮は人なれば左中弁とのもとに
来てをのかうへしろしめさるべき事を大納言などが
弁もうへもなくてよそ事とあるとの心也心もしらぬ
也

ぬらん宮仕まつりたるよしがなき人へといふ也
昔のけるのはとしはくわかくは人もまうあれんなどはるかく
まめやかなる事ゆゑ君たちのかた一ことうけてさしゆるしつべし
てなく思ひこめたりなれと　柏木のことを弁が来るさ
しくさひあり姫君たちの事も一つもおもくもとむるはや
さぬとの弁がいふ也
中納言の君にあひぬる人のとかくれたるもみな宮にはものするをあれハ
あしらふくかひくしうちとひおもひあらはさとにとゝろ
うしをなしぬ法ともに宮をこなひてふりしとなし
ちかくふくを拝くをつとおもしかとも物ほゆるにて
薫の心には弁尼姫君達にありしときハ柏木の事をとう
さしぬようかも申とも古人のとはずがたりをするハ
侍ときまほしとなれハさやうなるひまもなるけれとも

姫君達のあたりへしぬるわかりまうしなとも弁尼を
さらひおんとなくしてある法にもうとこ姫君達の
ことも語くもとハ姫君ありけるにてせむあれとの心
あるかくしもくさやちら柏木のかなしみたるへかりぬのんと
みもてなしまいて八宮のしにそひなしるて情みことおぼゆへき
さにいくに姫君とする君の物かたりしとの薫のんやうき
ゆへたよそのものかたりして八柏木のことをしへかとも
やま給とうありんとの遠慮あるへし弁八姫君に柏木
のるよしをやさしとも薫の心にはやたらかにひくさ海
くにこよひも　　柏木ひとりあらしはさみともつぬ事
とんあは柏木のことをよそにく姫君まいりをしとのん
う我身のまてんとさへし柏木のこと薫の身もめにみえた
よるされおひくにあるやのんなかるへし

今ハ報謝をきこゆる身ちりてくる事なきを
以は文字をわかりまいらせぬものゝためとの為也ゆへに詳
此ふるまゐし　けにそうらうてもふかそとて又きこへ候
るゆへ也
さや阿弥陀のみとの経しとなへてうらみ申すや仏とうらみのごとく
又凡夫はましてせ奴はなん
阿りとおもの経しとさそもわしき御許し給は誠に
あり給ふると思ひ出給ふも　文ハ文字の菩薩は鞠躬乃時まゐら
報恩もさしにゆへさ申うちとてせ也　別路さきや阿弥陀
杖やうちれるまてまうの日数をさしてぬ経はわかりし給ひてかき
をしう給ひしきてさうなりや　文字の菩薩われ給
もんもきことの経し杖もまきさま杖又日数をさの
ことさえきてそ経をも文字のおりしまき下もとい給ふとも

さしぬもハおもしきたりきやもやとも
ことにまいりくめくる給ひさうしひたくいとこと悲これ給ふし
うせいとおもうをにけさこうひ行うらと行くしてもまてあい
給へりしはもさる也　文字まさ凡人のまもまあうさこうらうそ
とてもいまさしう経まてさの任あすやそさうにさうつうひ
給へてもさうゆ文をさまをに而しうくゆゑる給ふても
念仏さこ給ちゆそへこ在てくうわくさいまさ年きそり
大徳也　竃僧達乃前こと隔くしてある徳也
給経んとのくうともあとそくゆくぬちゐまれと仏ハみなの花寺
ようしはうそんやもとやゆる給ひさる給めも
御念誦具たくこと
かく経ちまの人経あとさ人年もしなそん頃と
さん給らくよなりて珠枕かしくうんやそもあ千日あると
慈悲経

ござれたまくのうちにて億のけにあるへし蕉門也
とまりて世の始ちん四ちまくとく世のし紛をいてし出ゆき
うお問しけくさりし家　　雅意ちり世よの三字てようり
欲路をむしと蕉のとしちりて出ずま胸つまるとも
いさく蕉句りぬとかせたる哉めりしてたちら路りあるすれそ
同さ結　　蕉乃愚挙れ人くや翔也
林當の時め雲井よりてくしも此世代りもとのひちてられん
蕉ぶ　おの翔よるすあめさしてとあくとう起て出る
と見路へいりくと鳴まてうきもられたる世と志くはるさと
うすり時めいで井といふて時くられえのりとくしもとさう
両白さ亡ぶうあるへし

河合
鳥のうく家此路當を進洛のちとひつさせぬ世中ちれうさ

同枝撰
路久りまてとりしこも振なれなくろ枝てとにりりらくみて鳴

同
記さとしにま進に汁なくにとのれさへりくとれと鳴わりうらん
出る出の出あり女へめんし路時えまり此君てちち此待しとや
けりうひくさえしし路ふ　　蕉京よ梅路くく白雪ありもんく
めるすや
介色成りともん雨とれきとれ目し　香宮を祈んとろよ也
え路ぶり　　白雪の附也文雪ともうくれ給へて雅意ま進も蕉
めおのまし哉ある人ぶれも白雪のうひよる路ちん子はなよ
ひとあるへきとのんや
きられさゆくうとも出しみくるは待くましきめさに女うさはあれ
いさろさ　　白雪あまり此世在りとへ雅意のうもにはくましれ
こしにとひ路とも
よいてとりてさらちるゆ出の記ろうりてこのまうしく京也
すお迎さる人あるたりうりてとらりの進ぶるむちられ志てとゆ

かくてたゝんでけさをつくにかくしをゐるうめにたちて
むなしとそひとし給へり
なを思ひまはして給て　惟光の心も白氏文集にあるを
うらみとも白文の心は惟光のいふことを風流にありこのまし
ましき河のやうにいひ給へりともやうに藤りつらん
たる陵よりも法なしのとかに法をともうちなく
あやめしくらんといひ給へり給なり法なし志給
たゝなへし上惟光の卑下し給への心やしつき
とへ法臣のなり也
かくとおさまりて河きくらく九日なりけるを
惟光朝臣の心也
御くめのいかくるとあるは法を給ひ晩日今日とはかなりてはなく
御眼をとりたえたえるさまたるとも陽くるまとにせあゝし

うと
河吉　はなはゆくみちのはてゆくさゆすりにとよあつる
ぬとへ書て法りしを　文集のおもむきをせんとこれさとし
とちとおもひたの給へりとやうく晩りとりの福はやく
まなんとへいゆりしたとや見みて人の給へしとも
惟光朝臣の心也
我とへんもとくまさに法利給ひとやるとみんなとといひやるは
惟光朝臣の心は文集乃晩暮るにれくなかくん法の給へし
時を片時とともくまさなりてへむよりのこし此とあつ
なてくよふそとのゝあのいきとも
きくるとるといひはくるとも河のそのりしきたなりよなとあつ
法られとたゝ河ともゝのようになりあまくし物なるく
をはゝまし給ふともなくて変ゆるまのを
よ文集の給へりまゝ時とてさらを　惟光朝臣の心

つらしとものゝふになるめあるし打寄うつきさあども思
えぬうしをとや
風の音わくちらに吉へるぬ人かけもうら浦吉ちそ得くま氏
まけむも法はさまぐく地おろへ己をまむしう打ほゆうことわ人
それゆ右名はそうら余所をこてことくゆるさ示うらかくるかつ
法をとよりも本くてなし給よ年とくれすけ哉と　文字
なくうちの行ては風の音も今文字讀給まうほし見さて
ゐうさまにまきらくくんのかげきくるも思われなるとにつえ流らる
ときことはかりて字也
音霞の内りしも法をうけくとかくて是ハ河うくせの音なれと
思ふとも是くろひうちたるんやさきもとの思らし給
此詞のつゞきひきとにまへの所しろ文詞とそう
とんあるくたしとゆうれ年ハあうらもちすんと也　思はそくろれ

しきこし絵わしたまうく也あまち心そしう歟と
色ハ女房達の詞ややうく年を立かへるらんさとおり
春まも加うへかれしさこともはしたまうて富えす
可総ことまやいそこんやとの心也
心をなるはよりもおなまくうたてとくれと也給
心をなるはよ何ぞ推とうしあゐ也心えこ
あらくそたしとう歟　女房達のちうくめともろて今
のやうまつきやかたくさやうの人をうへたしとくれと也給
推え達のんや　歌　おの詞そつくれるえんよりも女房達
とのたまへるとあらくそふことくれとや
むつひの山あもそれくの今伝よくまうさ給しゆくしそく人も来
つきかうひしうわまりもいろくやおほくるにすまたにとくつれ雪
ゆきこと今ハあけしまうえはのめあるきんつとくあれ給ひや

るとも

是ハ文字の額に寺ゆゑにや宮の御むかひの時とそ
寺よりとゝへともけくさくへハさんハ河原院と申の由なり
寺給へ出そる事ともしとりにや文字の書かゝりあるとり
にそ末給ハめとゝの姫君の心や
さる人おかるにやゐひあかりうとかれ　くやうり給
らんとハ気給し給あかりかれしくさん
らんとハ気給し給あかりけりしきとや
なにとも見さるし山河をもわかりまさてのちまさきさへ
さしのそふかあるはめつらしきもお世ゝ給
ましし時も山桜のさつも思ひとも見ゆるしり今ハ鶴かう
ぬともなしく文よりく来ゐれとも一入なかれく君とや
此ころのしらてなほこれをところひく来る山人ともかりあ
さるものむかりもとるとやかれ捨をそてはゆかとて
年もやうく暮るその時菓子又ハ薪なとまて来よる

内さ所にろし
年比ゆりおかひさしくひさしくゐなあり宮つく人の今やそて年もし給へ
る心得そらなさなかんと書しなり　河原院よりも炭なと
奉り給時の文にや年くに炭来と見しなり
うかるもえそうゐ給山風よもれはつさるさとさなきとつけし
しとお世ゝ出くやり給ふ　文字おりましし時より年
の暮ゆ時ゆ河さりくゐ縮綿なとはうりし給ひと姫君のれ
わりめしそてくはうくし給とや
ほうしなかり人るとのかりゆくもみしこ見とほとい　と宮ゆゑ
となくくたちつて爰見とくらふ給　河さりよりまれ殺
ゐるゐにさや
はやくしなとかろハ給くもはううそれてわりしまさかうゐ
ゐやうなめよひ来る人もとのつらしさをうるまし

姫君達の心也文字をとひけるを打かへしたるをとも
おもふ人の寺あるをとまりも人の面白く奇特等へさ物とも也
いかに哀りんけんきくとも思ひ乃まゐるをたへて宮のしやうし
あとくらひ給ふ　文字出家してもおもひしまさはう
あなかなしともなく好くはやうにたへて涙をぬるゝ
肖まうしさ物ともとよく姫君達のおもひ給ふ也
君るなくて君乃けるをまもしより松の雪ともあはれとはみる
大君哥　文字かき給しより世の中の山へも人の
よみるを思まゐるゝとの心也何ところ見給ふ姉君之
ひのあまりに松乃雪をたへあきらむは面白さと見給ふも
也け文字りよく出てより何ともめ面白く思たるとの
後也けさる人は生りし給ひともおもひやりてよめる也
中乃君

奥山乃松葉にはまる雪だにも消えにし人を思はましかば
中君返　松乃清く雪は又それさ物なれば消え
も又はまるも文字も生をく一度きえし給ふとも又蘇生
し給へりしとの義也松葉とよる面白き詞也
うらやましくもそのともありきかや　松の雪を消くとも又
かり物もよく文字も消給ふとも又蘇生し給へりしと
乃姫君詞也
中納言乃君あはれにさ年八十まし色えさまかへしさう
むと打ほしき面おもしたるも　薫乃心は年比始をやう
てえやくり給ましくあれはとて菩薩に宇治へまうり給也
宮もいと深せさりよろしかるへきにかゝるに見もにほかしき
あのみかしね事をひしてるかしに持し給へるんたちのあさ
うへ行くもとおひして被行宮は生へよりも八君へのまゐりて行く

しみじみ思ふけくろうの事なれ
大概(タイガイ)の人さへ宮なとは富家
へだてしおはします薫の君もくるしき御ありさまくるしく
たまへるを思ひさしハ姫君をはさくハ打まかせぬ事なり
ましてさとも思ふより姫君の御ゆるしなくしてはさはくろ
ふせしるまじき也
さてそのあらしは大かたの事のなくなるなりそうたちにさ
きこひるまじきたつまかくと
深くなりたる火(ヒ)桶(ヲケ)なるべし　薫は尺をとりてさきるれ　姫君ハ灰をかきならし給ふ
なきはおもりかくる事出して来つるなる也　火(ヒ)箸(バシ)なる
とやうの物也
宮のまちかくひ給しゆゑしおほくとくへくと中のこゝ
薫の御心の内をさへ又々のまうしひとりしを思ひやる
也

たいめし給はずとはつまりしとのゝ打目にされとさひく
ますをやうまく人のこの月給へ過しえいかて思せんとそゆのし
給　姫君の心也　薫のこゝろひなきやうまてる給りん
と対(タイ)面(メン)し給ふも物うしあるへし
うちとくきはなけ過とさまをくよう思ハきをくしてえて
きてものゝとの給へる御さうとゆやをく
のなの薫の心也　姫君在
心をつくしあまり
なやうみくのこゝろえきくしうまうしとさひあるり御と
いとうちつきとある心の姫　薫の心のやうみくしと給
君をえきたびと打ひのけくも也
打かりぬへきせかりあらきめ思ふ給へり　薫の心
りあらえ随ふなんえとおもき字もけりさとくへり入志

ゆふべ也

又いとあやしくうつし給へれ給ひける鄉　白氏乃

蕉をを惜給ふとの心よしを姫君よかり給ふ也

哀なりし也一葉と歌う給ひけるとさしなさしなとれ侍

いそあるもやるもしゆのしたのきくん　又言乃蕉り寄

あらん嬢も姫君達のことを耕そうの給へしことく

也給ひけるとさしゆくと自然の清つくしく言ふへ也り

我かたつりとも有けるとや

又いとく海をたれ給んのかたくをしたてるを給ふや侍ん

とも又白氏の好をたのみて過し二而のたまひけるをかそ

横絆を推量し給ふとや

とにあんそともくも芳しさをなほ人さとそよのむを

姫君達のうすいをもかくも蕉の木く深く有人さに白

又の蕉をを耕給ふをひとをもとれとや

清蕉をよそくを侍るをさあるとはかそうこちらひ守ゆかりと

たひくるんし給ひを心ゆるをあるあなくくしちう給へれと

姫君の白氏をは清蕉をくくてて文の清をさへ給給ふ八

蕉のひらかしらやそうらしと言ひと惜給へとも我ハ

君惜れ分あるとのんや

里乃めきへいとめそれしとてあらしひ守く也と

おもるも蕉ハ守給乃素而を哀れを一句よ去り給ふと

とあんあるうとのの蕉のんや引あるをとあるうけよや

海里のそむ里れ君人よあらく在しくきんとのとへ乃きた

人のうつんとはんのるといかくうんとのんや

我ふうかいとさもとむてるうし守く給ふん

姫君を何くてさゆうふく白きめへ清有し去くをと　蕉の頭也

歌をよみそへたる也
をいはゝのやうに人を賀して奉るへしといふにやとしく
事かう打たえも絶えなり　白氏文を好まれし人の作よせ
上の人をといへるを見しかある可然人なるよしを業平の陳し
たくの歌也
歌をよりてあるとの歌にもちもれんかうてなしひろき中にもある
なとしゆかりしらぬ物よりたひ祝し給ふやとよみたまへる
を作り　白氏文の心を表文にもたひ祝ふぬ作ちあれ
ともそれそれりしかひたるを歌にやうてまへ人れんとる歌
八雲のを歌をぬけしおもく人のかへる祝賀しようしをひめ
共に業平の歌也
行をもあらにきてきひらくんをさしつかへをなくおもひけれ
或人の説にたくよのすそ歌をいふにきてひらくとあるもの歌を

みのゝふかんのうしをとゝし紗にそうの事しあけるほとにいかにもせん
ゆる人へ返事をとと祈りひ歌に人のあれた中にこゝろある
それうしにたまふやうしと作り
むかしけたる人の家にありける　此段もつくりさ翻也是ハ
みへ人の訴（ジン）人にたてるやしなるや業平のとも
まうおとく行ふのともあしきぬやうなる人さんさくう
たゝふことに身をとそれとも力（チカラ）あしいつく至せん是也（セジヤ）
事みそ事く云ひ分んをたまう心あつたやうあれ
とそれハ内をたつ人とや業平の幽霊を眺めより歌人ハ
在々文の人のかとおまへ男歌をいてめなたつそて
ハなりそといふんそあや
くわしくそめてハ立田川のかくる名をも申ていふひらく名
みのあたやうあらしるをとみなもちあし歌あれ

是とおもしく云人みなよろこびしなりたゞ人ハしらしたまへん
るゝなりやうなれどもその人の心月経まで川をそめて
ハ云人(ヒト)みな神代のむかしきかず物ぞとて立田河れをよく
からくれなゐに水くゝるとハいふなん云めの文なり
なりけるとぞ
れ人すなはち人の心よりおこりて河水ぞとぞくハ堪忍(カンニン)しが
たくなるをそめて紅葉(モミヂ)人の色をとぞなる物なれバおよ
その心ハひとつの人なる又その色にぞたてゞひて人を用心を
まばかりきるなりとも此頃もハ其の人の心をも
ぞうあそびしたるや
神(みまき)なひのとむろのきりやうなれん立田の川の紅葉なり
是ハ兼ての堪忍したる人ぞらへとふつきそ枝ぞ
ろのくろまでハ一入りしき物ぞとれたる人や

花
おもしきたへは迷きくしきん人をとこそくちまでそめてハ
とき里れとひとつよそてやさぬたゞ人よらぬをと
紅葉の志を経人なりけれバひとしなるへひとしくてたぐひ
おほくなりて物の経へさらんとぞたるふかくつゝしくをを
めおくりそまうやうなるむきをとあさとぞ踏経ましたるべき
なりなん
是ハ白菊花にて姫君に志を経てる
うるさひ行てよむまるよひおくり見ハ白菊の
心も経てしくもしめおくりてその姫君のところ
まぐれやうなるとは見るを経まじき白菊の寺しき
となん以と菫の姫君兼訓(ケタクン)の旬也
人の見んなりてわざとをゆくようり見て雪をしるべきと
白菊のことをとりて雪だにとふくうくも志りぬ人のさ
やさきあるく人とやや菫ハよくしりぬれのかを

いそり、
りしみなかりしくさりやとおほしよらんそのありてあらし
あらハところぬかきりをはなして侍りきまつりてんかし
大君の心ハ中君ハ白雲なりしかハさうなるとくおもひよらバ
そのかりてあらしさ薫の人のうへをさらにさむとや語也
此中君の語なんなるをおしはかりてさうしめといふとまあやうけり
てんひつきを語へと　ちハ薫のざれごとの語也薫の
白雲と宇治のう中君をとしるして思ふの手にかしんと
の義也　河中蝶のあるこころ行かくつきよしやとと
花
宮にれ宇治のうこひにおもひつきうしん義也みそうかりゆ
ミちもとこちみてろどうくひやうるといふゆかうにかの語也
右を(ヲチ三千)展りして足をかむしんぼうなり河に蝶(カイカイ)のんのろをまへ
るかくとおほしく侍りきと

秋はつかうれなる人おほしをうき給人のおやめきてらう
ろんうしとおほしめくらし給へく程なくさこえのみとお
まじ心ちしく　姉君の為うへとハゆめゆくもひかして
人のおやめきてとる中君れてと御白雲人所からう
へんかとおほしめくらしきとや
いかにとのみけくるきしの語かくるに中々なく宮かんことる
おほく侍しそてとこちからん給へるもおもひうかる納かう
第をんひおもしうなかる　大君の御也行と申しんきさう
まの語へん中々宮かんからちなとや
かゑゆしもてきこしめしおかへききこしことをひ語つきて
薫の御也唯今の御めう給る中君れてとあれハ大君の
ことおもへきるにハあらきてとや下れんと中君をとも
白雲を大君とハ御地よせんとのん也

さきは宮をとゞめてまゐりたる心ざしをかしとは
らんしようはこれらをみなくるしきくさを給へるよし
薫の詞也大君の為に薫のまゐるくしと宮御なりて参
給へるをさし給はん年ころのひんなくおもひしる事
よし也
かのゆかりにまかふまじきことにこそ人めかれ
抄 君なくて心よわかりし御のうへに薫よの給しや　白氏のたまふ中
ゆりなからうへなど給はせ御のうへにふ人もありぬへし也
御のうへの給はさを給ありしと　弄 白氏文集に常住有し
事也
いさやそれも人のまきはるかれたることとなり　薫の詞也
是は白氏の心に歸君なとやらん文妹君れなる宮
なからんとこそ也

ゆかりのかたにはいとかなしく給ひてもとひたまふ
なり
給ふを白氏へのはなむけたる大君のし給ひし大中君の
給なと薫の心給也いとく給ふといふ也
よう我きなるれとも心ありかきつゝも遂やて
ゝのはかなきかなもつくしむつられましとなきて
色やあ給ふ限
大君の心也薫はまとふかれ給ふて
ぞ白氏へ我はなとし給はぬと也
宮なりし山の撰君なりて文字をかなへるなりな
大君弄　我の心ハ薫なりて山深き撰ふ宮や
あ給はるかれなりしや下の心をおもふ薫の詞を
君へ消え也を白宮の花を給ふ事はかりするよ
やよひの給やうな年ゆき色なる人の給ふつらりを
一 いかなくもとつき給也は心とさめりひなき人は薫なる

てらなれ給ひし時の御ありさま[illegible]の[illegible]に
給ひしとて薫の心るも匂宮ならぬ君を
あさましき給やうよ[illegible]のことならぬの給ひしと給ひ
しさやうにの給ひくなとけしきに給ひし給ふ也
さりとてなし[illegible]給ひ[illegible]て[illegible]給ふひとへに中々たとへ
給ひ人々なれとて

薫の[illegible]也　自らの心のまよひ事
姫君の[illegible]の給ひとれ[illegible]とありさやうに給ひし給へし
薫ハ隔心[キヤクシン]でしるれ[illegible]也[illegible]しもとも[illegible]
ちかきとなり

ほしくとも[illegible]さまく山[illegible]なと[illegible]らへしくてしまつや[illegible]
薫也　[illegible]人へしくてしなハ匂宮のおもひへと中君
へしかてしく[illegible]大君よ[illegible]んとの[illegible]ろりとをと
もあやしくもそのりとるハ[illegible]ろうのひら給ひとよ

めり

[illegible]とけさん[illegible]しもおさらへ給ふし也
[illegible]の給へと　薫の姫君を[illegible]ハ[illegible]りをまぬの[illegible]
その[illegible]しかをも[illegible]ひ給ひてもそ[illegible]とも
めさりも

[illegible]山のあさんみゆる山の[illegible]あさくハ人とわりよ物[illegible]
[illegible]よ[illegible]しら[illegible]にて人給[illegible]
人也薫の[illegible]りひたきやうにの給へしいとくいう
[illegible]のこさとの心也

あさやうにて[illegible]しとくに[illegible]ハ[illegible]し給ひしと
薫の姫君の[illegible]しと[illegible]しもひやり給ひ心也[illegible]
らそにもろ[illegible]やう[illegible]はるれ[illegible]もしも[illegible]しし也
今やうれかくへ[illegible]られやうにてんきあをまて[illegible]さ[illegible]ハ

とあやしくのこやくれる心もくいなんもたびとしもろこし
語人の詩にもひなすれ
　南世のよりの人のやうなる
それやええんまじとは風流をはとハせぬや
かうく我をのしまりしくれとをつりそらぬ心らし語
ことに南まつく　葉の心は姫君のやうなる作と有
それとなれもひしみたらぬとや
かしなえことよ語を志てことう人なるのことのこと
し語人えんたつしうそむかしいかなるにたる物まゐ
やうにいかなし語をまことなる書いとしらぬなる
つとし流とものへもしはくまて語すんとてくれし
うかめてき詩も盛井此たまるや
ぬまに又とこにまつて語ても姫君の志らは　其角
りまてあし語とやされた葉のよつしくとたひて著

くらをに元禄待也
たに山里此やうなりと云うなる本の人をゆるましらぬ本
侍るなさと松風しをとへいふうまし詩人なとの語
を　葉の詞や京なりんとかより山里のやうなる本侍る
さやうのも同心し語いうて本んとや
いとめてたくくへさるら中やくるたにそてうちてむ女え
らのあるもなれとハいと見へしらいふさかやうなく
たるへさ我とて見はるる語くりいくく絶まし行く流る事て
つと詩ともの人へてめもさうれるとの中やむはとみくうち
あたし出させ行くり　いとめてた
女房たちそうんひなんや
あらの気に　中つた女房と一位ありあり思とみてたり
京へうつしなまんとの語をとへて出のくめてそなくる中

天下にひろくありて日本の中の天の下也さる故ハ又天下の外のきこえを
きくべし定め也てこそ也　其の心ハ中に天を含むあま天へ天竺
なし行かくそれへかりしなりんとの事也
花
女のうれしかるゝ方に而行人も中天竺雲ヲ路也而しきえの
こと成の中の天のさを有ましおとしるひ路也と
被けらつるゝまてさしかれしとのゝ事を　前句天下の
けい服をとるを路との事也
又つきとらへ法にかるゝ法にさそしてある
付
けい髣髴　髣髴　おもかげひとしからぬ
うれのけふ女のけしき人やとすの路をめしりそたり　作者
まのとかる人を形と路ハきられさたれそとも也
いよ形りしまさてのちん法そうんあて定さひ路
其のとれる人まの路祠也又之女教也去し路く媛たそ也

おもくわかくんと也
うちむきかつゆりてきにたなく
世中に形とよる人を侍しかかあくひとこゝろの法々名り　とのある人のあく格也
かゝれ方あ三十よ年とそくし侍つよゝれくと言ましし（て）時
山りしまつやも侍しんを
るも也次余年三十余年みゆるて可路也　高主人の祠也一不とハ文官れ
花吉
いつる路まれもと後なく年とのむしんを侍しんとかて
はむ人のまるまくおちての路ち也れまとハ形け方くあらちきかり
いとくへかつるをあり　れしの枝の法しをとるも也
行りしまるしくわきをさせ路つ道ハちつかくつくはまりて
又京の法庭にや
松のさ秋し花のかさらさおとろしつゝを　のくそけハ祠也又法
哀けて傍也むのうさうハ路路かとれる也也又花まむ也とく

行とまり路かりやみゆる山桜かとおもひやりて心さしもひ
たらさ　又是の句とかきりし一句也又説姫など見ゆる
見るへし　弁　作者其の行とまり給ふ心也
法ハ色を見そやらうさ心をしてともひさく
弁　蓋の文字ま出家をもし給ひて也悪しとも申也
立よらん陰とたのもし旅のむしろ山寺ま座まてあるとはかるや
蓋者　我ハ是一番出家の山そさとなりまりらしはれ
立よらんましと八本に聞にもやうにもひとかくしまて
日路へ見のひまれとの心も旅の都もしく宮路まれて旅
をも用法あれとめはそるも座とたまの綱まはゆるると見
やりてとこめさとも也ひとの行ゆくはかこあるんとある路
しとのんたるへし
去作人見
とさるれむかひの里ま旅法まいさんとしこそ夜のまたはあれ

日
我宿と見えし旅の中たえてつれ出てひやひひ見ら
うは詩の中四牡未とまりたる人といふなる
河之子于帰言秣其馬　毛詩
やそちしはゆるみ路くてはとこよれくくかの秋あまてめ
てまる日くるとまれそちぬあくまとはゆるとはかるまつの
ふくまみまうさとうはゆる上あるゝ見えて路をぬくまみあり
知さらんくおとろくしもとふまつまとまりまいるとおやしう
ちしまとるはりさう都とありんともまりと　蓋其見し
路にもみまき山路のへおもくとまりや
行ハへりますもり路の　蓋の心ハ山さくあるつひ
中人まとこへ出申にはあらたる秣をなとさせく
年のたれてもうくしもて弁尼は山かひともく山本
のやうにまうさとうし行とや　心　何やかやかりく年のた

祭と姫君のいつきれたれいへりきさわして京
らを語也
大くらやしに渡りまつりくに行となりて出給ふ
他所の人くに姫君人おりまふつきまつる人さとし
物と思語くる語也
年ころのあき八宮のたなふくしくなかに　藁すなこの
とし(か)ける也
竹のまろきをわらにつきくとりまてありし人あらとも有ら
たくましなるめ語　神の水をそらきんとるるれにとれん
これらも一ありまてありし人あらむちうれなあり
姫君のんとをあへんりとにり有くくましへものからぬ
極をとみくみ有ゆくも世ふしきと有あうしと鋭し　たら
山ややえ　此　ととあかくへりなる後あらかくるれるる

みくなとおかれ也
雀のくにまと宮さしに渡りて後ちありとてさいの拾へ
まくひあとなりそそる
花
宮居に神へぬまつりけりとも数助れ毛色に行われつけり
いとゐのはなの京れのかに渡りて八くる草本れくしな
りきさりひく　姫君のもの精をに有るとも
河
斎潔斎(ケツサイ)　中書　精進(シャウジン)也
日方
神垣に紗のおよそてつまへくとも人の心をまやさわへの墨をと
行る月日の立るしともみゆるを幾れ行し　かれなとへくれかふ
を　冬をたも去に行日のうち行くなとうり
行の行しなみんとさる語　姫君達の心に入くれに
たとせなる語くりまた時変なともなるつさかしれるとも也
君の行の宮中なへしむとかつまし人去しまやとまし去れなるしとも

大宮寄　み文字ハ必又宮ハ清く頼つきなしねやうと
旅ハ孫なれとも又宮の皆りしまして丶やうしの事
よりまうひろと来ると見えしう待しかるまてとあるを
きえし去の喜頼しも去しぬるや
宮名けおもけ行のこゝろをそらぬふつとうちやさん折やむしけして
中宮寄　みんなゆや秋のましかさとしそれこる為
あもまけむ人それとハたゞ為まつまんとのへや
頃引
去ゆてるや　花のやうハ事ハ清めハ行とうちさめへ為に
清ことやもて宮去や
ゆとられぬことくめうちつよひつてあをくし頼中
御さ度もうとも宮もうも折まくさ後さうへ口ひ宮そ頼うつ
さくりとあるすおほうやうあれそまいのうちへまくし
あふあるやと
兼又白宮ゆもとまるさ包て此のわれ生

例の武アうう頼さくことめうぬよすしや
花さうるもれくろ宮めさしなと物申しいそく　先ハもとれ
清う去初衆人白宮のまうて行時　山梅すきふあさ
召に為さそ折かしうさしを折うて有るみと行そく
しゆうてう紙とる南頼くや
その折見えさ頼し見えうちあとしもてとゆへ南うし
去年白宮の同ほし頼見えうちの宮治の八の清子の卿
をきあをと今にゆしくこうそくちくまの頼とや
見てそれは頼さうもみもみを似めしうめと物はうされは
まことうちて空ゆるにつと極うしうおほされ南う
見こと　八宮のまうや
待ふ見えし宮の桜のところまけ八千まと今さてもそ折てかさん
白宮寄　去年のまち去人清りいひろし頼へうこと

しきゆ中ゑとかく物みしてこむらのんと露ちぶく
さざれてかさんと候ふるや
やむ比ゆりてのほこう事を　白官よりなくさめて
の給也
あるましふる事う部とう給かうへと侍まくする事と
とりなしあはれ給文のうへなるさとまてきくしとて
中将のん也やりてかさむとうるに同心とあけまし
給文の御ふあまに侍まくあるまにたしきたるう
八番絵しいうその気也　玖御ある　知さしを
まいてまつまぞしれ心はみしさとし給也
とりくさくあるさとん雲深は霞こめく路やと紙さくくを
中将也　露こあたる花ち君かるこれの心也下紀小
雲深り霞こめあさとにて服むのくへをは心くあり給を

むとの仁也我同心し給ましうれしくうとうしくも也
隆家卿宰相中将の擬
たまひくさうしそれらは侍ま日法うしまのとり御まはきまに
とにありしや　うちかを別こともふるふへや
れはしわる給法心よあまるを給て八たく中納言と返ほう
いよしかしまめうとまうし給へるれしやまひあう
白ゑ乃ん也
いとうあらりてういろとかににうちつく人御のして
心ふ雅のそのらと我かうつくひをふみてうしろのうかを　萱の
いうそ也
ゆきめいたる物の方ととりんあるくを給はくハいるてくめうらん
みはあとや給人し宮とはんはおひし給か人し
白ゑのいとさゆつゆまうひあるはそうまし給くハさやうに

有さくハ宇治の姫君へのかよひハ薫大将の事なりしと也給へて
匂宮へハかよひし給ふくあらハされしとし給と也
心よりほかにうき世をすてかね侍るやとの給
匂宮の詞也我住んけり叶ぬ事とて人ハいまだこころを
給ぬるとも根とも思ひ心も紀のやうなるはだ
すけなくハ思ひあかるとも侍りしと也
折ぬとの云の君をとおほしいひぬるをあはれに思ひてきた
おほくも思はし年ふりし事を　夕霧れ雅光の女御給ひ
らの云の君を匂宮へまいらんとあるに同じ給ふに
とも大殿とはちかき関白殿給ふを云へし又摂政とも
云んとりしかも常れ大臣をとも大の字をとくべきを
折ぬハ度ともよむ也
ゆかし事の君のはひ奉るうらにも思ひくわきもくし

色はうつしく侍るまいされとも見へさるやうなんくもつ
うきをもかたはの給ひくちをきまひ給
んも匂宮ハ夕霧れおほくまし給ゆへも思はれうち　紅梅の同と云
よ云の君をしひ給ふ御つゐ給ひし夕霧のまへそめれ世に
ありきとも思ひとくもしをとうなきまいんもつくしき
との匂宮れんや
三条の宮やきそへ給の家も六条院よりうつり給ふなる
くれとものさくらしきにはまいきて　女三宮の御座
不火上也
宇治のかくらは紀せし色をもはせ世をし給ふれ　薫の
んや云書し給也
まめやかれるへの世をとえいとこそあるかるれ　薫を
宇人めて匂宮のやうにいつくしはし給ひて摂政がこと

あはれや也
いとのどかにとの御ありさまうちあるはしき女のかほのうちに給
さるはらんかたちは何さまとも見ぐるしからぬさま見えし
とおもひけり　薫の心也　姫君達は我ましてあはれもんと
とけ給はぬさまをもさしはかりて見はつしとも也
若の宮をんなと思ひをあかくて見たて給へとおはしそめ年ごろ
よりもあはれさとくちおしにはつかしくしきいんさやと
　薫は又宮此時ちとく長生は余給はんとおもしと姫君たち
のたのみ給へと也
相まひ出てあらんにまうで給ふり　薫の宮道人也
何さまその後より出給ふれとおやすくまうし給ふ前義を
まなびゆくて宮のおはしまし御物語しにとのちひとめし出
こめおはして
　八宮のこと也

さまかはることやれ仏の御前はよろこび給ふ御誦経をまうさせ
給ふとて　姫君達は持仏堂より御前にとも也
かの法をきゝたまふほとに御あかしのともしひのあかきとのつゝ
ちかくわたり給ふとちかくおほしきこえ給ふを
と持仏堂(ヂブツダウ)ちかけさせ給ふ常に我にせさせ給ふ御人をもよほし給ふ　薫の御給ふ
はあはしにこそうつりかはらせ給ひしのちにつけても
さる頃は何かのさまもあはれなるを　薫の心は姫君
とのまつりてはゆかしく見ゆる也
見まほしき御かたちなれとそのかたく有る扉の内をひきやりて
見給ふらんにも凡僧(ボンソウ)をとめ人なくてもうち
まぢくしく見えとこそ給ふとも也しくも陪従(バイジウ)にまや　薫の
何かくも参りしとおもひて　木丁をそへて見し給ふ
おもしろ薫の思念あるとの心也

むかしのそれなりしを　薫のたちかへるこゝろ也
用ゐもされにて侍りおくへゐるはゆるへもしそけ
またきのこ本丁をし出くこそやすらふ人あまりおほとゝのへ
しきものゝ紙しうて見ぬ人ゝえをうたとけしきを
本丁をひきよせてまのもとなふしよ侍りて仕ゑしまるらひく
侍るさうしよりきしまうを　女房達のおしえなりける
本丁をなしいそくら残てよりしめといふ也さきよ侍なれ
本丁就さ残り入侍りきたるる也薫乃かやうまでふれは本とり
ましなれとも又うましきとも也あるのもやうするのそうろ
頭髪思し侍本丁をし出てよは陰よう乃きえに侍さ
つきぬめ見紙かしけれるも侍るめをとしよせくも本丁をとらう也
侍るさまにとらへとなんかもあり中と　姫君の襲へ給
きんやもあるも也

まつひとりはゝ立出て本丁よりのそきて此侍従
そのへくれとうちゆるしておちひきあけつゝ紙又給ふなり
なり　中君のうるや薫の侍従の人く　納涼(ダウリヤウ)し侍り
見えを見ん給とや
見ゆるまゝ色のひとへまつらんたうれたる女乃きてなやし
あり　萱草(クワンザウ)ハ赤(アカ)きに黄(キ)のましつきたるとやりそてを
やしなひもてみゆる也相当したる心ちや
濃鈍色(コキニブイロ)萱草(クワンザウ)又服きん花(ハナ)きたる也薫たちたる也
中くなかきうるはしく花やかなりてみゆるをさらなしゆゑ
人ゝくあかり　服者の出立絹の紅の色との給ふや
おひかれきふえなるし前まへもそかくしてまゐらり
弄　うちを帯紐よも掛まうて袖てに女のくまの帯も同テネ
中君服中なるや何の帯よくかけ帯なるよ此也給一

裳帯とは唐(カラ)きぬの引こしと帯とのゝるにや脂粉の
えりなとのこともみひたなるへし　向云引こしハやうな
る物也それる時用や　一裳唐衣まてひたゝ納也ふ
うしきさしとて裳也とそ
いとそひやうにやうたいわりしもなるへのうと　まろくと
たちもそなへ紀衆也
うちさしにもそしぬほとなれんと見えてすゝきまそてちり
うまつひたくはやくと　中宮の髪(カミ)れなう紀衣也
こちもりこゝのうしきなりかさりてめるとあるへうすそと
見えそ白ひやうにやうくに　東おかみ也
打ほこなるたる帯たひ　太やうなる衣也
女一の宮とうき後に給ておかるほとなとほの見(タヅキ)えたりしも
そひらしてらまそてうちなけの　薗云の御名中宮の

内服の女一宮也　薗云のきとのきを給ふに可然人とも見えくる
くやとおほし出る也
又つきるもみそてうれちうしハあしうにとしき所まと見ゆるところを
給へるようなうちこを給ぬさ御してよしあらんとおほ也
大宮の御とも給へる
うしはなかんさしれほとときこし所そにならめりしき後
ありたるとも　中宮のまうへなるをまきらとたるなる也
あなくさよ屏風をそへて待りの　女房達の絹なる屏
風きまとよく守そてされたく色のそうしとやも
つきなさニあしことの給れ給りしとわるさへくなみなるくいふ
あるとも　薗のうちつま八の衣紀給りしとや也
ゆるしうも有へこさりさりあとそうしろめたなきにありの給
ほと帯手なるもみてとさまるひをゐくる也　薗云との

さし紀行て見よと云給へる此詞くた〳〵しくへるさうの字
詞也
くろかみをとくさねわかしやうなるをあひとさし給へ(ま)と
にあひたるのあるせれさねやとおれしやうなるなあかぬと
八花背なるう脂えとの義也　作　さくしの見ゆうほえ
せさうものや
花さなつしうなさめさて哀常さんくるしうおほゆ
脂えなれとも又一きえ方にくみゆるとも
うさきうくれる限とにわらすなうへし　文宮の
熱傷(シヤウシヤウ)り大花此鬢の粉らあるゝ也
をゆすくしはさるとことありやらとかつのとくあらそへ
とわりしを見いとよりてはなうやうなり
色鬢といふはうつくしく見ゆるや其所の事なく

ひんくしさといふや鬢をいたちて八せうひといふ名乃也
まそとといへたり　花　文なる鬢(ヒン)也八尺とも云鬢髪なかくさかり子
鬢八尺と云ん也
翡(ヒ)翠(スイハ)鳥(トリノ)名(ナ)赤(アカキ)羽(ハネヲ)曰(ヒト)翡(ヒ)青(アヲキ)羽(ハネヲ)曰(スイト)翠(スイ)々(ハ)小(チイサクシテ)如(ツバメノ)燕(ケ)毛(ニテ)青(アヲ)黒(コク)色(イロノ)翎(ツバサ)
深(フカク)青(アヲクシテ)有(アリ)光(ヒカリ)彩(サイ)飛(トンデ)水(ミヅノ)上(ウヘニ)食(クラフ)魚(ウヲ)翡(ヒハ)大(オホキサ)如(ハトノ)鳩(ケ)毛(ムラサキ)紫(アカク)赤(ツバサ)翎(テン)點(テント)々(シテ)青(アヲシ)
不(ス)深(フカカラ)無(ナシ)光(ヒカリ)彩(サイ)棲(スミテ)不(ス)食(クラハ)魚(ウヲヲ)今(イマ)俗(ゾクニ)翠(スイハ)赤(アカキ)曰(ヒ)翡(スイト)翠(イフ)云々　今
案(アニ)翡(ヒ)翠(スイ)ハせうびと云名也くろしきいつく翠ハ大さ燕の
ごとくしてあふよりとひて魚を合ふと云へるとかせうひを
翠とおさへる也云々　弄　翡翠ハかくしき抱なまる也文云
鬢をもとくとてさのとくろしぬといふなりあり云を
河　紫乃とにう紀たる語をかさてふもち行へるてはさ
紫式吉事句端也又山脂(ヤウ)あは色毎有え紙のとくとも同なり
あり紫上祖母乃脂をねかふなかしくまえゆきとさかわして

およそ父宮のちかひをまつることはおほよそ忌（キ）をもとゝなり
又六条御息所よくして神ぞと何ゆゑりとも六条乃おほきおほ
葵の巻も乙女巻に斎院（サイヰン）御服乃時なりしより源氏の君と宮
乃紙よりて御ちかく葵の花を付て生たるやうに
られなるを源氏をさまたげてやもくなるべし
中君よりも大君をおそれ思ひとや
まちたり侍るまゝをさして人にもいふとにかあらん
中君乃うへや
このさを見るをこせたるいとおひさやうつさせま
大君のうへ中君乃御けんしをさしあるはおひさや
う侍るたるものや